

トロワグロ *trois grotesques*

山内ケンジ

(登場人物)

斉藤はる子

田ノ浦修

添島和美

斉藤雅人

添島宗之

斉藤太郎

添島照男

一場、一幕の舞台。(場面転換、暗転はない)

閑静な住宅地。添島専務の、ルイス・バラガン風の邸宅。の、ここはテラスという設定。舞台中央におおきな壁があり、テラスの左右と、壁の真下の3辺にベンチがあり、人々が座れる。壁の向こう側には、左右から回り込める。向こうには廊下やら居間やらがあるのだろう。そして一番上手に玄関へ通じる通路。一番下手に階段があり、テラスから直接2階へ行ける。2階には、浴室や家人の部屋などがあるのだろう。ここから砧公園の一部が見える。2014年の、東京の初冬の夜である。最近では初冬でも蒸し暑い日があったりする。

今、パーティーが行われている。斉藤はる子がそこにいる。ミウミウの上品なブルーの、ノースリーブのワンピースを着ている。手にはカクテルグラス。スマートフォン。画面を見たり、公園の方を見たり。

微かな音量で鼻歌を歌いはじめた。テラスにはCDプレーヤー、何枚かのCD、いくつかのグラス、灰皿などが乱雑というほどではないが置いてある。というのもパーティーの夜だから。

田ノ浦修がやってくる。彼女を見て、ため息をつく。はる子、彼を一瞥し軽く会釈。

田ノ浦「あ」

田ノ浦、もう一度、ため息をつく。自然なため息。

奥から、かすかに数人の笑い声がする。はる子、また微妙に会釈して出ていく。

(おや、スマホをすぐそばのテーブルの端に置き忘れて行ってしまった)(田ノ浦もそれには気がつかない)

と、添島専務の妻、和美がやってきて、先ほどはる子がいた処に立つ。ウイスキーのオンザロックを手をしている。シャネルの胸のあいたドレスで豊かな胸を包んでいる。その黒いドレスの上には華やかなシヨールを羽織っている。

和美は田ノ浦を見ている。

和美、田ノ浦を見て、鼻で笑う。

田ノ浦「あ。え?」

和美「あ、いえ別に」

田ノ浦「あ・・・いやあ、夜は、なんだか」

和美「あ。ご存じ?今の人」

田ノ浦「は」

和美「今、ここにいた」

田ノ浦「・・・あ。今の」

和美「ええ」

田ノ浦「あ、いえ」

和美「今、ご覧になつてたから」

田ノ浦「あ、僕がですか」

和美「うん」

田ノ浦「あ。ええ。ま、いたから」
和美「知ってます？あの人」
田ノ浦「いや、ですから・・・どなたかなと思って」
和美「斉藤さん」
田ノ浦「あ」
和美「斉藤さんの奥さん」
田ノ浦「ああ。斉藤さんの」
和美「ええ」
田ノ浦「そうか。斉藤さんの」
和美「あ、斉藤さん、ご存じ？」
田ノ浦「斉藤さん。あいや。存じ上げないです」
和美「さつき、スピーチしてた。はじめに」
田ノ浦「あ、すいません、僕、ちよつと遅刻しちゃって」
和美「あ、そうだったんですか」
田ノ浦「すみません」
和美「いえいえ」
田ノ浦「すいません、どうしても、仕事、抜けられなくて」
和美「いえいえ、そんな、気の置けないパーティーですから」
田ノ浦「どうも。あのほんと、食べ物もなんかすごいおいしくて」
和美「ああ、よかった」
田ノ浦「パスタとか。あとあれ。あの、オリーブオイルに漬けたやつ、野菜とかあの」
和美「お好きですか。ああいう人」
田ノ浦「え」
和美「はる子さん。斉藤さんの奥さん」
田ノ浦「は。え、なんですか」
和美「別に聞いただけですけど。お好き？ああいう人」
田ノ浦「あ、斉藤さん。いやいや」
和美「え？いやいや」
田ノ浦「いや、好きとかそういうのは、別にあれですよ・・・ないですよ」
和美「そう？」
田ノ浦「ええ」
和美「じゃあ、あんまり好きじゃない」
田ノ浦「いや、別に。好きとか嫌いとか、そういうの、ないですよ」
和美「え、でも。今・・・なんかため息ついてらしたから」
田ノ浦「ため息」
和美「ええ」
田ノ浦「え、誰が。僕がですか」
和美「うん。すごい、切なそうに、なんか」
田ノ浦「ははは。まさか。なんですか、切なそうって」
和美「そう？でも今なんか、ついてらしたから。ためいき」
田ノ浦「いやいやいや、そんな。切なそうって、意味わかんないし」
和美、笑う。
田ノ浦「え？」
和美「ううん。ごめんなさい」
田ノ浦「・・・ま、でも、斉藤さんの奥さん、いい感じですよね」
和美「え？ああ、いい感じ。ええ・・・あ、やっぱり」
田ノ浦「はは。いやいや」
和美「ふふ」

田ノ浦「ま、でも、なんて言ったらいいかな。こう」
和美「うん」

田ノ浦「腕の感じってどうか」

和美「ああ。腕」

田ノ浦「ええ」

和美「ここ」

田ノ浦「そう」

和美「ああ」

田ノ浦「・・・」

和美は見られているので、

和美「やだ。あたし太いから。ここ」

田ノ浦「え、そうですか？」

和美、うなづく。

田ノ浦「いや、そんなことはないでしょう」

和美「いえ。あんまり見ないでくれますか」

田ノ浦「え、そうですか？でも・・・太くなんかいいですよ。（シヨールみたいモノで）」

和美「はる子さんに比べたらぜんぜん太いんですよ。どうみても」

田ノ浦「あ・・・いや、そうかな？ま、そう言われるといくぶんふつくらとした脂肪とい

か」

和美「脂肪って、それだとなんか、実際よりなんか」

このセリフの途中で、添島宗之（専務。この家の主）がやってくる。

宗之「あ。川島さんがお帰り」

和美「あ、そう。はい」

和美、田ノ浦に、

和美「太ってる感じしちゃうじゃないですか」

田ノ浦「いえいえ、そんな」

和美「でも実は・・・夏なんか、こう、手をふれないんですよ。ここんとこのお肉が、ぶ

るぶるしちゃうから」

田ノ浦「あ、でもそれは信じがたいな、ちよつと」

宗之「ちよつと。なに、はいつて。お帰りだから」

和美「え？」

宗之「お帰りだから。川島さんたち」

和美「あなた、お願い。あたしちよつと」

宗之「でも挨拶ぐらい」

和美「お願いよ。嫌なのよ」

宗之「子供じゃないんだから。すいませんね」

田ノ浦「あ、いえ」

宗之「ちよつと来てくれよ」

夫は、（玄関へ）行く。和美は、田ノ浦に会釈するでもなく、不満げについていく。

田ノ浦は僅かに会釈。

田ノ浦「あ」

田ノ浦、ソファに座り、先ほどの和美のセリフをつぶやく。

田ノ浦「・・・やだ。あたし太いから。ここ」

と言つて微笑する。

と、斉藤雅人がやってくる。やはりグラスを持っている。なんとなくやつれた

感じた。

雅人「あ」

田ノ浦「あ」

雅人「あれ、添島さんは」

田ノ浦「あ、奥さまなら、なんか玄関の方へ」

雅人「あ、じゃなくてご主人のほう」

田ノ浦「ご一緒ですよ。なんか、お客様のにお見送りに」

雅人「あ、そうですか・・・そうか。じゃあ」

(行ってもしょうがないか、みたいな感じ)

雅人「・・・あ。田ノ浦さん、でしたっけ」

田ノ浦「あ、はい」

雅人「すいません、さっき気づいてはいたんですけど」

田ノ浦「ああ、いえ」

雅人「他のお客さんと話し込んでちゃって」

田ノ浦「あ」

雅人「・・・えっと、確かあれですよね、去年のクリスマスの時に」

田ノ浦「は」

雅人「六本木の。リッツカールトン」

田ノ浦「ああ、はい」

雅人「ねえ」

田ノ浦「あ、あんど、いらつしやいましたっけ」

雅人「ええ、いましました」

田ノ浦「あ。ん？そういえばなんか」

雅人「ええ」

田ノ浦「・・・あ、すいません。ちよつと記憶になくて」

雅人「いえいえいえ、ぜんぜん」

田ノ浦「すいません・・・ええと、お名前は」

雅人(同時に)「あそつだ、確かトヨタにお勤めで」

田ノ浦「あ、はい。あれ」

雅人「ねえ」

田ノ浦「ええ。あ、そうですか。去年」

雅人「ええ、須藤さんに紹介されて」

田ノ浦「あ、そうでしたっけ。それはそれは。すみません」

雅人「いえいえいえ、ぜんぜん」

田ノ浦「ほんとなんか。たぶん酔ってたんで」

雅人「あれですよ、確か、うちの甥っ子のことも言ったんですよ。トヨタに勤めてるって」

田ノ浦「あ、そうですか」

雅人「今、マレーシアにいるって」

田ノ浦「・・・あれ。それ、聞いたな」

雅人「ええ」

田ノ浦「ああ。はいはいはい。須藤さんに」

雅人「ええ」

田ノ浦「はいはい」

雅人「やっぱ覚えてらつしやいました？」

田ノ浦「はい。すいません。思い出しました」

雅人「そりゃよかった」

田ノ浦「すいません」

雅人「よかった。どうも。斉藤です」

田ノ浦「あ。斉藤さん」
雅人「はい」

間。

田ノ浦「あ。じゃあ。斉藤さんの奥さんの・・ご主人」

雅人「ん？」

田ノ浦「あ、だから、あの、さっきお会いした、斉藤さんの奥さんの」

雅人「あ、いえいえ。オレ、今日ひとりですから」

田ノ浦「あ、そうですか」

雅人「ていうか、今・・ひとりもんだし」

田ノ浦「あ、じゃあ、違うんだ、ぜんぜん違うって（いうか）」

雅人「あ、たぶんあれだ」

田ノ浦「は」

雅人「ほら、さっき最初にスピーチした人いたでしょう」

田ノ浦「あ」

雅人「あの人じゃないかな。斉藤さんというんですよ。デザイナーの」

田ノ浦「デザイナー」

雅人「ええ。サンアドの」

田ノ浦「あ。そうですか。じゃあ、斉藤さんがふたり」

雅人「ええ」

田ノ浦「あ、奥さんも入れれば3人」

このセリフの途中で、斉藤太郎がやってくる。妻を探しているふう。

雅人「あ。あれ」

太郎「あ」

雅人「噂をすれば」

太郎「は」

雅人「あ、こちらが斉藤さん」

田ノ浦「あ」

太郎「あ」

雅人（太郎に）「今、話してたんですよ」

太郎「あ」

雅人「こちらが今、僕と間違われて。斉藤違い」

太郎「ああ。ねえ」

雅人「あ、田ノ浦さん」

田ノ浦「あ、田ノ浦と申します」

太郎「あ、どうも。斉藤です。あれ、ええと」

雅人「トヨタにお勤めの」

太郎「あ、トヨタに」

田ノ浦「あ。ええー、（名刺を出して）田ノ浦と申します」

太郎「あ、どうもこれは。すいません、ちょっとボク名刺、さっき、使い切っちゃって」

田ノ浦「あ、いえいえ」

太郎「斉藤です」

田ノ浦「あ、はい」

太郎「斉藤太郎」

田ノ浦「あ」

太郎「で、こちらが斉藤雅人さん。兄弟でもなんでもなくて」

雅人「まったくの赤の他人」

田ノ浦「ああ、なるほど」

ははは、となごやか。

太郎、名刺を見ながら、

太郎「あれ。じゃ、どこかでお会いしてましたっけ」

田ノ浦「いえ。初めてです。添島専務の奥様と、ちよつと仕事で」

太郎「ああ、そうなんですか」＋雅人「ああ」

田ノ浦「ええ」

太郎「じゃ、斉藤さんとも何かお仕事で？ 斉藤さんて言うの、なんかへんだなやつば」(笑)

雅人「ああ」

田ノ浦「あ、いえいえ、去年ちよつとお会いして・・・今日、久しぶりっていうか」

雅人「ええ」

太郎「ああ。ああ、そうですか・・・じゃあ、驚かれたでしょう」

田ノ浦「は」

太郎「彼、すっかり変わってて」

雅人「はは」

田ノ浦「あ」

太郎「だって、去年だったら、こんなだった。ねえ」

雅人「90キロあったから」

田ノ浦「え。90キロ」

雅人「ええ」

田ノ浦「あ。じゃ、ホテルでお会いしたときは」

雅人「ええ。こんなでした、まだ」

田ノ浦「あ、じゃあ、わかんないわけだ」

雅人「ですよね」

太郎「ねえ」

田ノ浦「ねえ。じゃあ、わかんなくていいんだ」

雅人「ええ」

なごやか。

田ノ浦「なんだあ。え、どうしたんですか。ダイエットされたとか」

雅人「あ、いや。ちよつと病気で」

田ノ浦「あ」

雅人「胃を、切ったんで」

太郎「うん」

田ノ浦「あ、胃を」

雅人「ええ」

田ノ浦「あ、そうなんだ」

雅人「ええ」

田ノ浦「切ったっていうのは、そのう」

雅人「あ、切り取ったんで。ほとんど」

太郎「ね」

田ノ浦「あ。そうなんですか」

雅人「ええ」

既に、斉藤はる子がやってきていて。

はる子「でも、こう言ったら失礼かもしれないけど、ほんとびっくりしました」

雅人「あ」

はる子「ね。ほんとお元気そうで」

雅人「まあ」
太郎「なに、どこにいたの」
雅人（かぶって）「あ、でも、ちよつとここ、塗ってるんですよ・・あ」
はる子「ん？」
雅人「ちよつと。あんまり青白いのもよくないかなと思つて・・ちよつと塗ってるんですよ」
太郎「あ、そうなんだ。ぜんぜんわかんないな」
はる子「お化粧、うまいんですね」
雅人「そうですか？初めてやつてみたんだけど」
太郎「いや、すごい自然ですよ。ねえ」
田ノ浦「ええ」＋「雅人「ええ、まあ」
太郎「どこのですか」
雅人「え」
太郎「ファンデーション。あれともコンシーラー？」
雅人「あ、ファンデーション。ファンケルの」
太郎「ああ」
はる子が笑う。みんな反応。
太郎「えなに」
はる子「だつて」
太郎「ええ？」
雅人「ですよね。（田ノ浦に）ねえ」
田ノ浦「え」
はる子「ほんと・・でも」
太郎「まあ（いいけど）・・それより、どこいたの」
はる子「向こうで。ご夫妻と」
太郎「ああ。じゃあ、そろそろおいとましなきゃ、ね」
はる子「あ。うん。そうだね」
雅人「でもあれですよ。あのう、奥さま、ほんと色白で」
はる子「？」
田ノ浦「ああ」
太郎「ああ、ええ」
はる子「え」
雅人「ねえ、色白でらっしゃるから」
田ノ浦「まったくです」
はる子「え、それってどういう意味ですか、斉藤さん」
雅人「え？いや、色白でおきれいだっていう、そのままの意味ですけど」
はる子「ええ？」
田ノ浦「まったくその通りだと思いますよ」
はる子「え、なんですかそれ」
太郎「ま、そう。家内はね、昔から。ま、色の白いは七難隠すつて。ね」
はる子「そうそう。色はね、確かに白いけど。色だけは」
太郎「はは」
雅人「ああ、なるほど」
なごやか。
太郎「ええ・・じゃあ」
はる子「うん」
雅人「あ」
太郎（はる子に）「専務、向こうかな」

田ノ浦(かぶつて)「え、そんなことないでしょう」
太郎「ん？」
田ノ浦「七難隠す?・・え、なにも隠す必要、ないですよね」
太郎「え」
田ノ浦「つていうか、ひとつも隠す必要ないんじゃないかと」
太郎「ああ」
雅人「あ、そりやそうですね」
田ノ浦「すばらしいことです」
雅人「・・すばらしい。ん？」
田ノ浦「今、斉藤さんがおっしゃったとおりでございますよ、僕は」
太郎「え？」
雅人「あ、ええと。どっちの」
田ノ浦「あ、もちろん、(雅人を示して)こちらの」
太郎+雅人「ああ」
太郎「ま。あの」
田ノ浦「あ、すいません。別にご主人を非難してるわけじゃないんで」
太郎「・・ああ。もちろん。別に非難されてるとは思ってないんで。ええ」
田ノ浦「あ。だったら、よかったですけど。(雅人に)ねえ」
雅人「・・ん」
はる子「あの。ええと。ごめんなさい、今更ですけど」
雅人「あ」
はる子「こちらは」
雅人+太郎「ああ」+田ノ浦「あ」
雅人「ええと、こちらはあの、田ノ浦さんと言って」
田ノ浦「どうもすみません、申し遅れました、田ノ浦と申します」
はる子「あ、斉藤です。あ、妻です」
田ノ浦「あ」
はる子「ほら、なんか、ハアハア言つて。息を整えてらしたから」
田ノ浦「あ」
太郎「ああ、そうなんだ」
田ノ浦「ええ、さつきは。なんかすいません」
雅人「・・あ、トヨタにお勤めで」
はる子「え、トヨタつて、あのトヨタ」
田ノ浦「あ、はい。自動車会社の」
はる子「ええ。あの、クラウンとか」
太郎「お、よく知ってるね」
田ノ浦「はい。僕はプリウスの、次のやつをやってるんですけど」
はる子「プリ、え？」
田ノ浦「あ、プリウスですね。ハイブリッドの」
はる子「えー、なんかすごい」
雅人「ねえ」

太郎「あの、やってるっていうのは、あれですか、開発してるとか」

この途中で、添島夫妻が、何かしゃべりながら入って来る。

(声) 宗之「ほんとに?」

和美「ええ」

宗之「ちゃんと確認したの」

和美「したわよ」

和美「あ」

太郎「あ、今、ちょうど」

和美「ええ」

太郎「ええ、すっかり長居してしまつて」

はる子「ほんとにごちそうさまでした」

和美「ごめんなさい、あんまりお話できなくなつて」

太郎「あいえいえいえいえ」

和美「もう少し、いいでしょ、いろいろ聞きたいこともあるし」

太郎「あ」+はる子「あ、でも」

宗之「悪かつたね、なんか今日、川島さんの奥さん、やたらテンション高くてさあ」

太郎「ああ、川島さん、ええ」

和美「もう、自分の自慢話ばかりで。ほんといやんなつちゃう」

太郎「はは」

宗之「まあ、そう言わないでさ」

和美「だつて、さっきのイソップの熊の話、あたしのことでしょ?」

宗之「まあ、いいじゃないの。もう、そんなこと★・・ね、もう少し飲んでいってよ」

太郎「あいえ、もうすっかりごちそうになつちやつて。ほんと楽しかったです。な」

はる子「ええ。ほんと」

(★からダブる) 和美「あたしになんか言うとき、ほとんど全部皮肉なんだから。だいたい、

あの人だつて、自分のことしか考えてなくせに(田ノ浦に気がついて)あ、あ。田ノ浦

さん」

田ノ浦「は」

和美、はる子を示して。

和美「こちらが・・あ、もう、あれ?」

田ノ浦「あ。ああ。ええ。今、紹介していただきました」

はる子「あ、はい」

和美「あ、そう。じゃあよかつたけど。田ノ浦さん、はる子さんのこと、ずいぶん気にし

てらしたから」

はる子「あ」

田ノ浦(笑)「いやいやいや」

和美「え、そうだったじゃない、さっき。腕の感じが好きだつて」

田ノ浦「あ、は」

太郎「腕の感じ。え?」

和美「ええ」

太郎「あ、はる子の」

和美「ええ。腕がきれいだつて」

太郎+雅人+宗之「ああ」

田ノ浦「いや、それは。ま。その」

はる子、自分の腕を気にする。周囲も腕を見ている。

宗之「なるほど」

太郎「ま。確かに、あの、今、そういう話になってて。だから。まあ」
はる子「え、ちよつと」

和美（かぶって）「あ、そうなの？」

太郎「は」

和美「そういう話になってたんですか」

太郎「あ、ま」

田ノ浦（同時に）「え？そういう話？え、なんですかそれ」

太郎「いやだから今、そういう。ま、いいんだけど」

雅人「あ、まあ、そりやそうですよ。ねえ」

太郎「え？」

雅人「だって、そりや、僕だってそう・感じますもん」

和美「え、なにが？」

雅人「いえだから。田ノ浦さんの気持ちですけど」

田ノ浦「いえ、僕は、ただ」

雅人「ま、入院してるときは、とてもそんな気は、起こらなかったですけどね」

和美「・・あ。ま（さと）・・斉藤さん」

雅人「は」 十太郎「は？」

和美「あ、ごめんさい、今、誰だかわかんなくなっちゃって」

雅人「あ。あ、僕ですか」

和美「ええ。あんまり、あれ。あの。ほっそりしちゃったから」

宗之「ああ、ほんとほんと」

雅人「ああ。あ、でもそれはさつきもう。あつちで。ねえ」

宗之「うん。でも、いくら言われても、斉藤くんだっていう、こう、まだ実感がね、わか

ないっていうか」

雅人「ああ、すいません。ま、自分でも、自分じゃないみたいなんで」

宗之「までも、こう言っちゃなんだけど、その方が健康的に見えるよ」

雅人「あ」

和美（笑っていない）「ほんと。健康的」

宗之、既にたばこを吸っていて。

宗之「あ、そっか、じゃあ、たばこはもう止めたか」

雅人「あ、一応。やめました」

宗之「ああ、そりや悪かったね」（消す）

雅人「あ、ぜんぜんかまわないんで」

宗之「そうか・・ま、でもそれも健康的だよ」

雅人（笑）「ええ、まあ」

宗之「僕も一度やめたんだけどね」

太郎「あ、そうでしたよね」

宗之「うん。でもストレスでさ」

太郎十雅人十田ノ浦「ああ」

太郎「ええ」

和美、鼻で笑う。

宗之「・・あ、じゃあ、ごはんもうまいでしょ。たばこやめたら」

雅人「あ、いや、まだあの、固形物は食べれなくて」

宗之「あ、そうか」

雅人「ええ。ま、そのうち」

宗之「うん・・・あれ、なんの話・・・あ、腕の話だね。はる子さんの腕が美しいっていう」
はる子「え」

太郎「あ、それですか」

田ノ浦「いや、もうそれは」

宗之「いやいや、君ね、よく言ったよ、」

田ノ浦「あ」

宗之「いや僕もねえ、今日、ずっとそれ言おうと思ってたんだよ。(妻に)ね」

和美「・・・」

宗之「いや、いくら友人と言ってもね、口に出すのは失礼かなって思ったんだけど、でも
ま、考えようによつてはね、むしろ、ダンナの前でちゃんと言えば、別になんのあれも、
ま、後ろめたさもね、いや、ほんとでもあれだよ、はる子さんの二の腕。つまり、な
めらかでまぶしいよね何だかね」

はる子、太郎、苦笑い。

太郎「まあ。ねえ」

宗之「あ、でもこれつてやっぱセクハラかな」

和美「当たり前ですよ」

宗之「あ、そう。そうなる」

和美「ええ」

宗之「でも、単純に賞賛してるだけなんだから」

和美「賞賛しようが貶けなしようが、女性がイヤなきもちになることは全部そうですよ。
ねえ」

はる子、苦笑い。

宗之「そうか。ま、確かに、社内だったら問題になるか」

和美「ええ」

田ノ浦「あ。でもですね」

太郎(同時に)「まあ、でも。それほど。ええ・・・あの、じゃあ、(僕はそろそろ)」

宗之「でも肝心のはる子さんはどうなの？この賞賛については」

はる子「は」

宗之「このあなたに対する賞賛を、どう思ってるの？」

はる子「ああ。あの・・・ええ。うれしいですよ。ええと。田上たのうえさん、あたしの腕をほめて
くださって、ありがとうございます」

田ノ浦「あ、いえ」

雅人「あ、田ノ、浦です」

田ノ浦「あ」

太郎(同時に)「あ、そうそう」+宗之「うん」

はる子「あ、ごめんなさい。田ノ浦さん。そう、すみません」

田ノ浦「あいえ」

はる子「あの。うれしいです。でも、今、口に出したら、ヘンだな」

太郎「え？」

はる子「だって、あたしの腕をほめてくださって、あたし、なんか特別な技術がある
人みたいで」

和美以外の人々、「ああ」「確かに」等と反応。

雅人「職人さんみたいな」

宗之「料理人とかな」

はる子「格闘技とか」

なごやか。が、同時に和美、出ていくので、

宗之「あれ、どこ行くの」

和美「お酒。斉藤さん、持って来ましようか」

雅人「あ、いえ」+ 太郎「あ、いえ」

雅人「僕は、だめなんで」

太郎（同時に）「うちはもう、これで、」

和美「うん、でも」

太郎「おいとましますんで」

はる子「ええ」

和美「ええ、でも」

宗之「あ、じゃあ、オレ、おかわり」

和美「はい」

和美、別室へ。

宗之「ま、みなさん、座ってよ」

太郎「あ。でも」

宗之「まあまあ。ここ、悪くないでしょ。風が入ってきて」

雅人「ええ」

宗之「座って座って」

太郎「あ・じゃあ」

人々、近くの椅子等に座る。

宗之「ふん・・・確か、小説で・川端康成の小説で、片腕っていうのがあったよね」

太郎「片腕」

宗之「知ってる？」

太郎「いえ」

他の男性たちも知らないという態度。

雅人「知らないですね」

宗之「確かね・・僕ぐらいの年の男に、ある若い女が、自分の片腕を貸してくれるっていう話。今、それを思い出したよ」

太郎「はあ」

雅人「え、腕を貸す？え、それはどういう・・どうやって」

宗之「ああ。こう、ググッと、もぎとって、貸してあげるっていう。たぶんね」

雅人「あ、ロボットですか」

宗之「いやいや、そういうんじゃないかって。もつとこう、ほら、耽美的っていうかさ」

太郎「ああ、川端はね」

宗之「そうそうそうそう」

田ノ浦「え、その男の方は片腕なんですか」

宗之「男？いやいや」

田ノ浦「男は普通で」

宗之「うん。男はそんなことないよ」

田ノ浦「じゃ、なんで女は腕を貸してくれるんですか」

宗之「うん、確か、その若い女の腕がきれいだったから、じゃないかな」

太郎「はあ」

はる子「確か、いきなりこう始まるんですよ。片腕を、一晩お貸してもいいわ、って」

宗之「そうそうそう。あ、読んで」

はる子「ええ、ずいぶん昔に。最初のとこだけ。強烈だったから。そこだけよく覚えてて」

（宗之「ああ」 あとはぜんぜん覚えてないんだけど）

宗之「うん。ま、でも」

はる子「でも、その男は一晩、その片腕を借りて、家に持ち帰って、自分の片腕と付け替

えたりとかして」

宗之「そうそうそう。で、付け替えた女の腕といろいろ話すんだよね」
はる子「あ、そうそう。そうだった」

宗之「ねえ」

雅人「腕と話す」

はる子「ええ」十宗之「うん」

太郎「あ、ロボットっていうよりあれかな、アンドロイドなのか」

宗之「いや、そういうんじゃないって言ってるじゃないの」

はる子「SFじゃないのよ」

太郎「ああ。いや、」

はる子「もつと・・だから耽美的なのよ」

宗之「そうそうそう。そうなんだよ」

太郎「いや、今のはわざと言ったんですよ」

宗之「あ、そうなの」

はる子「ほんと？」

太郎「え？」

はる子「嘘」

太郎「いやいや、ほんとだよ。え、今のわざと言った感じだった、でしょ？」

雅人「え。あ、そうかな（と言って、田ノ浦を見る）」

田ノ浦「あ、今のですか」

このセリフの途中で和美がお酒やつまみなどを載せたトレイを手にやってくる。

太郎「あ、すみません」

雅人「田ノ浦「あ」+はる子「すみません」

宗之「いいのに。向こう行くから」

和美「向こう、今すごいことになってるから。あれで。クラッカーとかで」

宗之「ああ」

和美「今、加納さんに片付けてもらってるから。さ、取って取って」

太郎「あでも、もうこんな時間だし」

和美（時計をまったく見ずに）「え、そう？もうそんな時間？」

太郎「ええ？」

和美「あなた、そんな時間？」

宗之「え？いや★・・なんだよ」

★和美「田ノ浦さん、そんな時間？」

田ノ浦「あ。いや、たいした時間じゃないです」

和美「ねえ」

和美、田ノ浦の頭を触る。

はる子が笑う。

なごやか。

太郎「じゃあ、一杯だけ」

和美「雅人さんはジュースでしょ」

雅人「あ。あ、そうです。すいません」

宗之「あ、斉藤くんは雅人っていうんだっけ」

雅人「あ、はい」

宗之「あなた、よく知ってるじゃないの」

和美「そりゃそうよ。みんな斉藤さんなんだから」

太郎「はは」

雅人「みんなでもないですけど」

宗之「うん」

和美「だってこんな小さい地域社会で、斉藤さんが3人もいるんじゃない」
太郎「確かに」

なごやか。

和美「だって、下の名前って」
宗之（同時に）「でも、そうなんだ」

なので、妻が譲る。

和美「あ（いいわ）」

宗之「でもそうか、酒もだめなんだ」

雅人「あ、ええ。まだちよっと」

宗之「今日、飲んでなかったっけ」

雅人「ええ」

宗之「そっか」

雅人「一滴も」

はる子「残念ですね。お酒お好きなのに」

雅人「ええ、そうなんですけどね。まあ、しょうがないです」

はる子「ええ。でも、今、我慢すれば、そのあとの喜びも大きいですよ」

雅人「あ」

はる子「あたしも、つらい事があると、いつもそう思うようにしてるんで」

雅人「え、奥さま、つらいことなんてあるんですか？」

はる子「ありますよ、いろいろ」

太郎（笑）「なに」

はる子「え、なに」

太郎「ええ？」

雅人「え、奥さまにつらいことはないでしょう」

はる子「その奥様やめてください。はる子で。ひとつ」

雅人「あ」

田ノ浦が聞こえないくらいの小声で、

田ノ浦「はる子で。ひとつ」

はる子「ん？」

田ノ浦「あ」

（和美、それを見て「ふふ」と笑う）

太郎（はる子に）「つらいことなんかしないでしょ」

はる子「？」

太郎「いや、ないことはないかもしれないけど、斉藤さんとおんなじレベルのわけないん

だから。そりや名前は同じなわけだけど」

雅人「あ、いや、別に。それは」

はる子「・・・そうだね。ごめんなさい」

雅人「いえいえ、そんな。ぜんぜんいいんですよそんな」

間。

和美「ね、今さっき、なんの話、してたの？」

宗之「あ、さっき」

和美「なんか、みなさん盛り上がった」

宗之「ああ。（ええとね）」

田ノ浦「でも、あの。病気と、そういう、日常の苦しみていうか。はまあ、比較できな

いのではないでしょうか」

宗之「ん」

太郎「え？」

田ノ浦「あ、今の、つらさの比較の話です。病氣と、日常の苦しみとは比較できないんじゃないかって、思うんですね」

宗之「ああ」

雅人「あ、そうですね、そう思います」

田ノ浦「ええ。そういう感情っていうのは、相対的なものではないかと」

雅人「相対的。ああ」

田ノ浦「ええ」

宗之「うん。わかるよ。そういうことって、人それぞれだっていうことだよ」

田ノ浦「そうですね。例えばシリアの国民は今、大変苦しんでるわけですよ」

宗之「・・・あ、シリアね」

田ノ浦「ええ。実際、もう、何が起きてるかわかんないくらい、たいへんなことになってるわけですよ」

宗之「ふん」

田ノ浦「どう考えたって、日本の方が幸せですよ」

宗之「うん」

田ノ浦「でも、日本だって、数年前はとんでもない悲惨なことになって、色んな国から同情されたわけですよ」

雅人「ああ」

宗之「そうですね」

田ノ浦「だから・・・あ、それに、例えば、自殺率なんかは、日本はものすごく高かったりするわけですよ」

雅人「ああ、高いっていいですよ」

田ノ浦「だから、ある人がつらいことがある、と言った場合ですね、その程度というのは、もしかするとシリアの国民にも負けにくいくらい、ほんとに、つらいかもしれないわけですね」

雅人「・・・ああ」

田ノ浦「ですから、一概にですね、」

太郎「あれ、それはあれですか、僕に対する批判をしてるとか」

田ノ浦「・・・ええ？いやいや、そんなつもりはぜんぜんないですよ。え、なんで」

太郎「え、でも、暗に、いや、ぜんぜん暗じやないな、要するに、今、僕が家内に言ったことを非難してる、っていうことですよ、言わば」

はる子「ちよっと」

田ノ浦（同時に）「違いますよ、まったく。ないです、それは」

太郎「でもあなた、さっきも僕に、なんか言っていましたよね」

田ノ浦「なにをですか、僕は（なんにも言っていないですよ）」

太郎「いや、なんかあれだな、さっきから僕に対してこう、なんかつかつかかかっているような気がするの、あれかな、僕だけかな」

田ノ浦「それは斉藤さん、全く違いますよ」

太郎「そうですね？」

田ノ浦「そうですね。まったくそんなことないですよ」

太郎「そうかな」

和美「それは、ものすごくわかりやすい話ですよ」

太郎「は。ん？」

宗之「ん？なに、わかりやすい話って」

和美「だって、田ノ浦さんは、はる子さんに一目惚れしてしまったんでしょう」

間。

宗之「・・・ああ」

田ノ浦「ははははは・・・」

和美「やだ、笑ってる」

笑う田ノ浦。

和美「照れ隠し」

田ノ浦、笑いが消える。

田ノ浦「いや」

和美「違うの」

雅人「・・田ノ浦さん」

田ノ浦の目に涙があふれる。

田ノ浦「だって。だって」

和美（笑）「嘘、泣いてるの？」

田ノ浦（泣）「僕だけじゃないでしょう、それは」

宗之「おい」

雅人「ああ、多感なんだな、田ノ浦さんは」

（和美、笑いが消え、夫をにらんでいる）

はる子「ごめんなさい、あの。主人が、失礼なこと言って」

田ノ浦「あ」

はる子「だからですよ」

田ノ浦「あいえ、そ」

はる子「あなた、田ノ浦さんに謝ってよ、ちゃんと」

太郎「え、なんで」

はる子「だって・・（小声）今ので、あれしたんだから」

太郎「いや、関係ないだろ、今のは、奥さまが」

はる子「でも、その前のあれじゃない、あんなケンカごしになるから」

太郎「そんな、ちよつと意見を言っただけでしょうが。オレ別に（彼に対してそんな）

はる子「だってあれであの人、えらい緊張（しちゃって、あんなになったんやん）」

宗之「まあまあまあ、あのさあ。そんな大げさなこと（じゃないでしょ。うちのがまたち

よつとからかったっていうかね）」

和美「ええ、おっしゃるとおりですよ、田ノ浦さん。あなただけじゃないですよ。だから、

そんな心細い気持ちにならなくていいと思うんですよ。ここにいる人たちは、みんな

はる子さんが好きなんだから。あなただけじゃないから。大丈夫。でしょ？」

雅人「・・ああ」十宗之「はは」

和美「ねえ。だって、さつきからみんなそう言ってるんだから。しかも、こうやってご本

人のご主人がいらっしやるところで言ってるんだから。これがいらっしやるらないところ

だったら、ま、ちよつとムフフな感じになっちゃうけど、いらっしやるんだから。ねえ。

とつても健全だと思っただけ」

宗之「ああ。それはさつき、だから、僕も言ったじゃない」

和美「ねえ。もう、この人（夫を示し）なんか、先週から大変なのよ、はる子さんが来る

からって、腹筋とか始めちゃって」

宗之「いやいやいや・・あなたね、どうしたのよなんか。酔ってんの」

和美「酔ってなんかいませんよ。ご自分こそ真っ赤になっちゃって」

宗之「ええ？ いや、僕は酔ってますよ、そりゃ」

はる子「あの」

和美「違いますよ、今のが凶星だから真っ赤になってるんでしょうって」

宗之「凶星って」

はる子「あの、あたし、そんなことないと思いますけど」

和美「ん、なにが？」

はる子「ですから・・あの、確かに、こちら、トヨタの。ええと」

田ノ浦「あ、田ノ浦です」十雅人、宗之、太郎「田ノ浦」

はる子「あ、そう。ごめんなさい、田ノ浦さんに、腕を褒めていただいただけで、つまり、それだけなんで」

和美「え、それだけって？」

はる子「それだけのことだと思っんです。だから、おっしゃってる、みなさんがあたしをどうとか、それはちよつと違うと思っんですけど」

和美「え、ごめんなさい、おっしゃってることがよくわからないだけど」

はる子「あ、だから」

和美「つまり、みなさんがはる子さんに首つたけつていうのが違っつていうこと？」

はる子「あ、もうぜんぜん違っいます、首つたけなんて」

和美「違くないわよ、ぜんぜん」

和美「だつて、田ノ浦さんだつて、雅人さん、こちらの斉藤さんだつて、うち（夫）のだつてそうでしょ」

雅人「あ」

宗之（同時に）「うん。それはある意味、そうなんだけどね」

はる子「えでもでも、だからあの・・あたしの腕が、なんかあたし、白いで褒めていただいたつていう、それだけなんで」

宗之「うん。ま、でも」

和美（同時）「あのね、はじめはそういう感じだつたけど、でも今はもう違っんですよ、あたしがお台所へ行つて帰つてきたら、もうぜんぜん、まつたく空気が変わつてたんだから」

はる子「変わ・・え、今ですか？」

和美「ええ」

はる子「え、どう変わつてたんですか」

和美「もう、まつたく。空気が。世界が」

太郎「え、それは」＋雅人「変わった。え」＋宗之「え、なに」＋田ノ浦「え、それはどういう」

はる子「意味わかんないんですけど。わかる？」

太郎「え、変わったつて、なにがですか」

和美「それは・・ちよつとあたしの口からは具体的には言えないけど」

太郎「ん」

宗之「具体的に言え（ないつて）」

和美「でも、とにかくはつきりしてるのは、ここにいるみなさんが、もうすつかり、はる子さんの美しさの、なんていうのかしら・・奴隷になつてることです」

太郎「は。え？」

和美「奴隷。美しさの。え、でもあれよ、あたしは別に、はる子さんを責めてるとか、そういうんじゃないから。ただ、事実を言つてるだけなんで。そのへん、誤解してもらつたら困るんだけど」

はる子「え、ちよつと待つてくたさい。あの、なんかよくわかんない」

和美「ううん。わかるとかわからないじゃなくつて、事実を言つてるだけなんで」

はる子「ちよつと待つ・・あの、あたしそんなにきれいじゃないですけど。つていうかぜんぜんきれいでないですけど」

和美「え、なに言つてんですか、おきれいよ」

はる子「ううん。あたしなんかぜんぜん。それだつたら、奥さまの方がぜんぜんおきれいだと思っいます」

和美「なにそれ。やめてよ」

はる子「奥さまだつて、あたしと同じくらい色白だし、それに、今の、」

和美「やめてくたさい、そういうの」

はる子「それに今の、美しさの奴隷ですか？そういう性的なことをおっしゃるんなら、奥さまのその豊満な胸は、(今日は)

和美「は？」

はる子「その豊満な胸。今日ははじめっからすっごい、そういう魅力を振りまいてらっしゃると思うんですね」

和美「なに言い出すの、いったい」

はる子「え、そうですよ、だって・事実ですから」

宗之(苦笑い)「いやあ」

太郎(同時)「はる子、(ま、そのへんでさ)」

はる子「えだって、うちの主人だって、さっきからずうっと、目のやり場に困っちゃうって言うってだし、」

太郎「ええ？いや」

はる子「雅人さんだって、あの・トヨタさんだって、さっきから見れば、ちらちら見てましたよ。ねえ」

雅人「え」

田ノ浦「いや、あの」

はる子「でも、それって当然だと思うんですよ、それだけ美しい胸の谷間が目の前にずっとあつたら、当然ですよ。あたしだってそうでもん」

和美「えちよっと、なんでそんな今、何の関係もない、あたしの胸のことを出すのかしら」
はる子「それは・事実を言ってるだけです。だって、奥さまが事実を言ってるだけだっておっしゃるから」

和美「そんなことで対抗してなんになるの？おかしいわよ、あたしが言ってる事実は、ね？あなたがとにかくきれいで、周りの男性が全員虜になっちゃってるっていう事実ですよ、それだけのこと。あたしの胸のことなんて・・(夫に)え、ちよっと、黙ってないでなんか言ってくださいよ」

宗之「え。ああ・・え、何を言えはいいの」

和美「なに言ってるん、だから、はる子さんの美しさについて意見を言ってくださいよ」

宗之「ああ。だからそれは言ってるじゃないの、さっきから。とてもおきれいで・・いや、こんな改まって言うまでもなくね・・え、でも、え、なんでそんな言い合いになっただけ」

和美「言い合いになんてなってませんよ」

はる子(途中から)「なってません」

宗之「あ、そう。だったら、別にさ」

はる子「あたしは、あたしより奥さまの方が、はるかにきれいだっていうことを奥さまが承諾してくればそれでいいんです」

和美「なにバカなこと言ってるの、そんなこと承諾もへったくれもないわよ、そんなことできるわけないじゃない。事実じゃないんだから」

太郎「あのですね。まあ、もう遅いですし、そろそろあれなんですけど」

宗之「ああ、そうだね」

和美「そうね、ごめんなさいね」

太郎(小声)「な、ハル、僕らはもう、(こころ)で」

はる子「太郎くん、さっき言ったよね、あの谷間に指を一本、入れてみたいって」

太郎「うん。通りに出ればタクシー捕まるからさ」

はる子「それに、色の白いは七難隠すって、あれって、なんのひねりもないわけでしょ」

太郎「いやもう、(今夜はさ)」

はる子「あれってあたしがただの色白のブスってことだよ、それ以外に意味ないもんね」
太郎「なに言ってるん、あれは」

はる子「いや、いいんだよ、別に、ほんとのことなんだから」

太郎「いやいや、あれは言葉の綾っていうか、(逆説的な意味で)」

はる子「だから、言つてよ、あたしそんなもんだって、奥さまに言つて」

太郎「いいだろ、もう」

はる子「言つてつて。言つてよ、あたしはそんなもんだって」

太郎「ハル」

和美「はる子さん、落ちついてよ」

雅人(同時に)「ちよつと、どうしたんですか」

雅人、言いながら吐き気をもよおす。というか様子がおかしい。

宗之(同時)「ねえ、ちよつと」

はる子(同時)「いいから言つてよ、言つて」

太郎「いい加減にしろよ」

はる子「言つてよ」

突然、雅人がその場に倒れる。人々、反応する。「あつ」

宗之「どうした」

和美「どうしたの?・・・雅人さん」+田ノ浦「斉藤さん」

雅人「あ。すいません」

和美「大丈夫?」

雅人「あ、だいじよぶです。すいません。ちよつとまだ本調子じゃなくつて」

宗之「ああ」

雅人「う・・・ちよつとトイレ」

太郎が雅人に手を貸そうと

太郎「あ」

雅人「あ、だいじよぶです。いやいや、すいません・・・ちよつと」

和美「ほんとに大丈夫?」

雅人、トイレへ。和美、ついて行き、すぐに戻ってくる。

宗之「だいじよぶかな」

太郎「ねえ」

間。

はる子「あ・・・ごめんなさい。今。どうかしてました」

太郎「ほんとだよ」

宗之「うん。はる子さんもねえ・・・ま、謙遜は日本人の美德ではあるけどね。でも、実

際、みんながその美を認めてるんだから、というより、実際そうなんだからさ、ねえ、

なにもそこまで卑下しなくたってね」

はる子「あたしそんな・・・そんなつもりないんです。そういう、神経使ったりできる人間

じゃないんで」

宗之「あ、そう。でも」

はる子「ほんとどうに、奥さまのほうがおきれいだと思うから言ってるだけで」

和美、タメイキ。

宗之「いや。それはね・・・美の感じ方はひとそれぞれなんだから。あ、そうそう、さつき

のあれ、彼じゃないけど、それこそ相対的なものでしょ。あのねえ、谷崎もね、陰影礼

賛で書いてるんだけど、美つて言うのはさ、もう、光ひとつでいくらだつて変わるわけ

なのよ。つまり、明るいところで見ると、暗いところで見ると、そのものでは、そのもの、

作り自体が違うつていう。つまり、今の僕らは西洋の美の価値観に、ま、支配されてる

わけじゃないですか。例えばほら、お歯黒つてあるじゃない。(あれなんかもう、典型的

な」

和美「あなた、もうやめてその話」

宗之「ええ?でも今」

和美「・・・」
宗之「ま、そっか。そうだね」

田ノ浦「いや」
はる子「でもあの、そんな微妙な差を言ってるんじゃないかって」

太郎「うん。この人はほんとにそう思ってるんですよ。嘘のつけない人なんで。な」
宗之「うん」

はる子「でも・・・失礼しました。取り乱しちゃって・・・お酒のせいだと思うんだけど」
田ノ浦（太郎に）「あの、ほんとにそう、っていうのは」

太郎「え？」

田ノ浦「今、おっしゃった、はる子さんがほんとにそう思ってるっていうのは」
太郎「ああ、もちろん、自分よりも奥さまの方がおきれいだっていう」

田ノ浦「ああ」

はる子「あたしは・・・ほんとにそうだと思います。でも、こんな、なんか駄々こねてるみたいになっちゃうのは、本意ではないんで」

田ノ浦「あ」

和美「そうだ。田ノ浦さん」

田ノ浦「はい」

和美、シヨールを外し、自分の二の腕を露わにする。息を呑む田ノ浦。

太郎「あ」

田ノ浦「！」

和美「どう？あなた、腕が気になるんでしょう？・・・しっかり見てくださいよ」

田ノ浦「え」

和美「あなたの意見を言っただけです？」

和美「見て・・・ほら」

宗之「和美」

田ノ浦「・・・あ・・・う」

雅人が戻ってきた。

和美「あ。だいじょうぶ？」

雅人「あ、はい。すいません。だいじょうぶです」

宗之「あ、そう」

和美「ほんとに？」

雅人「ええ、ちよっとまだ消化が」

太郎「ああ」

雅人「ええ。でも、もうだいじょうぶなんで。お酒も飲んでないし」

和美「じゃ、よかった」

雅人「ええ・・・あ、お手伝いさんの方が、掃除終わりましたって」

宗之「あ、そう。じゃあ」

和美「うん。でも、今、ちよっと・・・腕を見てもらおうって」

雅人「え」

和美「雅人さんも、お願いします」

雅人「え？なにを」

和美「あ、そうだ、すいません、ちよっとそこ、いいですか」

和美は、太郎の座っていた位置に座り、はる子と並ぶ。

太郎「あ」

和美「ちよっとごめんさい・・・ほら見て。この差。どう？田ノ浦さん」

田ノ浦「あ。えー」

和美「忌憚のない意見を、お願いします。はる子さんに誤った認識を訂正してもらいたい

から」

宗之「和美。はる子さん、困ってるじゃないか」

和美「はる子を一瞥」「……」

田ノ浦「それは、あの。一概にはどっちとは」

和美「そんなことないでしょ。あなたにははつきりわかるってあたし、わかってるから」

田ノ浦「あでも。いえ、甲乙つけがたいと言うか、ま、クラウンとプリウスの違いといひますか」

和美「ふざけないで。真剣に聞いているんだから」

田ノ浦「いえいや、でもこうして並んで、改めて拝見すると、ほんとに……(雅人に)ねえ」

雅人「あ。ちよっと、よくわかってないんですけど……ちよっと座らせてもらいますね」

和美「ね、田ノ浦さん、そこからじゃあれでしょ、もっと近づいていいですよ」

田ノ浦「あいや、ここからでいいです」

和美「だって、正確にジャッジしてもらいたいし」

田ノ浦「あ、でも」
和美「さつきも言いましたけど、こうやって手を振ると、ほら……のお肉が、ぷるるんてね」

田ノ浦「あー、でも、その感じも、僕はちよっどいいと思うんですけどね」

和美「ほら。ここ。びろーんて」

宗之「和美、向こういって、果物でも食べようか」

和美「どう、これ」

田ノ浦「……あ、じゃあ、すいませんけど、両方上げてもらっていいですか」

和美「両方」

田ノ浦「はい。もしよければ(和美、両腕を水平に上げる)……あ、ばんざいかな。(和美、ばんざいに上げる)あ。ああ……なるほど」

雅人(咳払い)「あ、これ、お水ですかね」

宗之「ああ」

雅人、水を飲む。

和美「もういい？」

田ノ浦「あ。はい、すいません」

主婦、腕を降ろす。

和美「はる子さんには？いいの？」

田ノ浦「あ」

はる子「あ、あたしは」

田ノ浦「あでも、はる子さまは、もうじゅうぶん拝見したので……にしても奥さまもほん

とに。ええ」★

雅人(田ノ浦に)「え、これは」

田ノ浦「あ。ええ」

★はる子「ね、あなたもちゃんと意見言つてよ」

太郎「え？」

はる子「意見。言つて」

太郎「あ」

和美「あ、斉藤さんはいいですから」

はる子「あたしはわかってるけど、ちゃんと言つて」

太郎「え、なにが」

和美「ご主人の意見は、あたしはいいですから」

はる子「えでも、田ノ浦さんだけじゃデータとしたって不完全だと思っんですけど」

(田ノ浦(つぶやき)「あ、やっと覚えてくれた」)

和美「いえ、ご主人ははる子さんのご主人なんだから、いいんです。だって客観的に言えないっていうか・・・さっきの様子からだって、どんだけはるさんを愛してらっしゃるかわかるし、」

はる子「いえそれは」

和美「だから、はる子さんの方がはるかにきれいだっておっしゃるのはもちろん分かっています」

はる子「だから違うって言うてるのに」

和美「もちろん、わたしとしてはそれが真実なんだから、ぜんぜんいいんですけど、でも、それってやっぱりお身内なんだからフェアじゃないわけですから」

はる子「そんなことないです、それはぜんぜん違うんです」

和美「なにが違うの？だってさっき、田ノ浦さんにほら、ああいうふうには、詰め寄ったのは、(あなたに対する強い愛情があったればこそなわけじゃない)」

この途中で、

太郎「あ、いや、わかりました。じゃあ、言いますから。客観的に。客観的な意見を。ね」
はる子「ああ、いいんじゃないの？」

太郎「うん、じゃ、もう一度よく見せてください」

太郎、和美に近寄る。

和美「だから。いいです」

和美、傍らにあつたショールで自分の腕を隠す。

太郎「え、なんで隠すんですか。専務、いいですよね、拝見して」

宗之「え？いやそりゃ別に」

太郎「ほら。じゃ、見せてください」

和美「いやです。見ないで」

太郎「え、なんで？今、あんなに見せてたじゃないですか」

和美「だから言ったじゃないですか、あなたには(見せたくないって」

太郎「いや、おきれいなことはわかってるんですけど」

と云って、ショールを剥がそうとする。

和美「いや、触らないで」

太郎「なんで」十はる子「ねえ」

和美「やめて」

宗之「ちよつと」十雅人「あれ」

太郎(同時に)「だって、さっきは(自分からあんなこと(してたじゃないですか」

ショールを奪い取る。

和美「あああ」

宗之「おい」十はる子「ちよつと何もそんな」

太郎「さあ、見せて」

和美「助けて。いや。やめて」(興奮している)

太郎「ああもう、なんでかなあ」

と、添島照男が入って来る。缶ビールを手にはしている。

雅人「あ」

人々、気がつく。

照男「・・・どうしたの」

宗之「ああ」

照男「ただいま。どうしたの」

太郎「あ」

雅人「あ。ええと」

和美「おかえりなさい」

宗之「今、帰りか」
照男「ああ」
和美「遅かったわね」
照男「遅くなるって言ったじゃない」
和美「そうだっけ」
照男「なにしてんの」
和美「ええ？・・別に。ちょっとあれよ」
照男「なに」
宗之「ええと。あ、息子です」
太郎「あ。息子さん。あ、おかえりなさい。いや、うかがってはいたんですけど、こんな
ご立派な」
宗之「ま、身体だけはね。でつかくて」
和美「挨拶なさいって」
太郎「あ、いえいえ」
照男「しますよ、今。どうもこんばんは。照男です」
宗之「サンアドの斉藤さん」
太郎「あ、斉藤と申します。お父様にはいつもお世話になってます」
照男「こちらこそ、父がいつもお世話になってます、ってハルさん。え、なんでいんの？」
はる子「どうも。ご無沙汰してます」
田ノ浦（つぶやく）「えー、嘘」
照男「え、まじ、でもさ」
はる子「あ、夫なんです」
照男「あ」
太郎（笑）「ええ」
照男「そうなんだ、あそうなんですか」
はる子「うん」
太郎「あ、お知り合い？」
はる子「ええ、ちよっと」
太郎「ああ、そうなんだ」十宗之「あ、そうなの」十雅人「へえ」十（田ノ浦（つぶやく）
「うそ。信じらんないよ」
太郎「え、（どういう）」
照男（同時に・はる子に）「え、まじ知ってたの？ここんち、オレの家って」
はる子「まさか。今、だからすっごい驚いた」
照男「いや、驚いたよ」
はる子「ねえ」
太郎「いやほんと、奇遇ですねえ、そりゃ」
照男「あ、そうかそうかそうか、ハルさん、斉藤さん、ですもんね」
はる子「うん、そうそう・・あ、患者さんだったの。添島くん」
照男「ええ」
太郎「あ、そうなんだ。え、だったってことは、いつごろ」
照男「あ、あれ去年だよね」
はる子「うん」
和美「え、患者さんて」
照男「あ、虫歯。竹原歯科」
宗之「え、はる子さん、歯医者なの」
はる子「あいえ、衛生士なんです」
和美「衛生士」

照男「歯科衛生士」

太郎「ええ」＋宗之「ああ」＋雅人「あ、歯科衛生士」＋田ノ浦「ああ。そうか」etc

はる子「ええ」

照男「そっか、あれ・・・いやでも、楽しかったなあ、去年は」

はる子「ねえ」

太郎「・・・え、楽しかった？」＋宗之「え、何が？」＋雅人「え、何が？」＋田ノ浦「何が楽しかったっていうの？」

照男「あ、治療が」

太郎「あ、治療が」

照男「あ、もそうだけど、あと、合コンとかもやったし」

はる子「あ、そうそう」

太郎＋他の男たち「合コン」＋田ノ浦「あー、やったんだ」

はる子「そう。ちよっと頼まれて。他の子たちに」

照男「ええ。看護師さんたちと、うちら学生で」

太郎＋他の男たち「ああ」etc。

雅人「そりゃ、楽しいわけだ」

照男「ええ。でも、結局、はる子さんが一番人気者になっちゃって」

はる子「え、そんなことないですよ」

照男「唯一の人妻なのに」

宗之「ああ」＋雅人「うん」＋田ノ浦「んん」

はる子「・・・照男くんが一番、大人気だったよ」

太郎「ああ。そうだろうね」

照男「いえいえ、そんなことないけど・・・でも、今日は人妻っぽいですねえ、やっぱり」

はる子「え、そう？」

照男「さすがだなあ」

はる子「さすが？ええ？」

照男「だって、こんな服、着てるの・・・きれいだな」

はる子「ああ、服はね」

照男「なに言ってるんの、きれいですよ」

はる子「いやいや」（首を振る）

照男「いやいや、きれいですよ。ねえ」

太郎「はは」

照男「だって、特にこの、腕が、こう、なめらかで、白くて」

問。

照男（静けさに）「ん」

田ノ浦「あ。それね。わかります。ま、僕もさきほど、それ言ったんで」

照男「え？」

田ノ浦「腕については」

照男「え？ああ、腕」

和美、立ち上がり、

和美「ね、加納さん、いた？」

照男「あ、帰りますって」

和美「あ、もう帰った？」

照男「うん。今」

和美「あ、そう。言いに来ればいいのに」

照男「ちよっと入りにくかったんでって。言ってたよ」

和美「・・・」

和美「はる子さん」

はる子「はい」

和美「ささやく・ほぼ聞こえない）あたしの勝ちでしょ、やっぱり」
はる子「はい？」

和美、にやりとして出ていく。はる子、夫に「なんて言ったの？」と目で聞く。
太郎「いや、聞こえなかった」

雅人（超小声）「え、なんて言ったの」

田ノ浦（同）「あたしの勝ちだとかなんとか」

雅人（同）「ああ」

照男、田ノ浦に、

照男「・・・え、腕についてって」

田ノ浦「あ、ええ」

照男「え、それはええと、どういう」

田ノ浦「あ、ええと」

宗之「あ、そうそう。照男、こちらがこないだ言ってた、田ノ浦さん。トヨタ自動車の」

照男「え」

田ノ浦「あ、田ノ浦です。申し遅れました」

照男「あ。はじめまして。照男です」

宗之「うん。ほら、こないだ」

照男「ああ。ええ、僕、あの、内定もらってるんですよ。あ、就活中で」

田ノ浦「あ、内定。あ、トヨタにですか？」

照男「ええ」

宗之「そうなんですよ」

と同時に、

田ノ浦「ああ」＋雅人「ああ」＋太郎「ああ、そりゃすごい」

はる子（同時に）「え、すごい。おめでどう」

照男「うん」

田ノ浦「え、部署はどこなんですか」

照男「あ、でもまだ、どうしようか迷ってて。来週結論出さなくちゃ行けないんですけど」

田ノ浦「あ、じゃ、他にも内定が」

照男「ええ」

田ノ浦「あ、どこなんですか。あいや、もし差し支えなければ」

照男「あ。三菱重工」

「ほお」「ああ」等と雅人、太郎。

田ノ浦「重工。自動車じゃなくて？」

照男「ええ。飛行機作りたいんですよ」

田ノ浦「ああ。あ、こないだジェット旅客機、出しましたもんね」

太郎「ああ、そうそうそうそう、国産初の」

照男「ええ、で、なんか、今後は戦闘機も作っていくみたいで」

田ノ浦「あ、戦闘機」

照男「ええ、ボク、戦闘機作りたいんですよ」

雅人「ああ、戦闘機、いいですねえ」

同時に、太郎「ああ、いいですねえ、それは」＋雅人「ああ、戦闘機ね」＋田

ノ浦「戦闘機ね、これからはね。いいですよ」

照男「ええ」

田ノ浦「いや、たぶん、そっちの方がいいんじゃないかな」

（この一方、宗之がいつのまにか、はる子の隣に来ている。照男たちの会話とダブって。

宗之（小声）「乾杯」
はる子「え」

宗之「乾杯しようよ、も一回」

はる子「あ、はい」 はる子、飲みかけのグラスを持ち、

ふたり「乾杯」

宗之、はる子を、はる子の腕を凝視。

はる子「は？」

宗之、3人に気を付けながら、

宗之「これ、今晚、貸してもらいたいな」

と言って、彼女の腕を触る。

更に、「この腕」と言って迫る。

はる子、「えー、面白いな」と笑ってごまかし、と立ち上がり、テラスの柵

の近くにある数枚のCDを見る。CDプレーヤーが置いてある

照男「え」

田ノ浦「あ、三菱の方が」

照男「あ、そうですか」

田ノ浦「ええ、クルマはねえ、ま、もう、次の革命時代に入ってますから、もうね」

照男「はあ」

田ノ浦「つまり、今の形のクルマっていうのは、恐らくなくなると思うし」

太郎十照男「ああ」

雅人「ま、でもそれは、まだだいぶ先の話ですよねえ」

田ノ浦「ええまあ。あでももう、ドイツなんかでもすね」

照男（かぶって・雅人に）「あれ？」

雅人「は」

照男「あの、どこかでお会いしてますよね」

雅人「あ、ああ、すみません、ご挨拶が（遅れて）・・・無沙汰してます。あの、斉藤です」

照男「は」

雅人「あ、こちらも斉藤さんなんですけど、（太郎「あ、ええ」わたしも。斉藤。雅人」

（太郎はもはや妻を気にしていない）（田ノ浦は、はる子を気にしていたり）

照男「はあ」

雅人「あの、去年、お母様の、お花の会のとき、一度」

照男「お花の会。ええ、草月会館」

雅人「そうですそうです。お父様に、ご紹介していただきました」

照男「あれ。でしたっけ」

太郎「はは」

雅人「ええ。あ、ねえ、専務」

宗之「ん？」

雅人「去年のお花の会ですよね」

宗之「ん。ああ」

雅人「ええ」

照男「あれえ。すいません、ちょっと思い出せないな」

太郎、笑う。

照男「え？」

太郎「あ、失礼。あの、そのときこんな太った人、いたでしょ」

照男「は」

田ノ浦「90キロくらい」

照男「・・・ああ」

太郎「顔立ちはそうだな・・・ちようどこんなような」

田ノ浦「そう」

照男「・・・あっ」

太郎「ね。でしょ」

照男「あー、いや驚いたわ。ぜんぜんわかんなかったっすよ」

雅人「ええ。おかげさまで・・・すっかり健康的になりました」

照男「へええ。すごいな。こんな変わっちゃった人、初めて見た」

雅人「ねえ」 十太郎、田ノ浦も「ですよね」 etc.

照男「でもそっか。1年かければ、落とせるもんなんですね」

雅人「ええ。まあ」

太郎「ねえ」

雅人「ま、でもちよつと無理しちゃったみたいで。まだ体調がね、ときどき意識が飛ぶ
っというか」

このセリフの途中で（あるいはもつと前から）CDプレイヤーから、R&Bの音
楽が流れてき、はる子が踊っている。

宗之が合わせて踊る。

照男（笑）「ハルさん・・・なに、いきなり」

照男、田ノ浦、太郎、雅人はそれを見る。

宗之「この曲知ってる？」

はる子、答えない。踊っている。

照男（あきれて）「父さん」

宗之「それ。揺れる腕・・・昔、よく見たよ・・・光が流れて」

宗之、曲に合わせて、かけ声。笑うはる子。

太郎「ハル・・・なあ」

田ノ浦が踊りに参加しだす。

3人で踊る。田ノ浦、奇声をあげる。

照男が笑って、参加する。

照男とはる子のコンビになり、同じ振りをしたりする。田ノ浦、勝手にひとりで
踊り狂う。

太郎、次第に踊りだし、妻、照男と一緒に。太郎と照男が向かい合って踊る。

雅人も、力なく踊っている。

宗之、椅子に座り、何か飲んでいる。

和美が入ってくる。宗之が妻を見る。

宗之「ああ・・・はは」

和美、その様子をしばらく見ているが、踊り始める。

和美が踊り始めてすぐに、雅人、気分が悪くなり、椅子に倒れ込む。

宗之「あれ」

和美「だいじょうぶ・・・斉藤さん」

宗之が音楽を止める。

和美「雅人さん」

太郎「だいじょうぶですか」

雅人「あ。う・・・すいま、ふ。大丈夫です」

和美「ほんと？だいじょうぶ？」

雅人「さつき、間違えて誰かのお酒飲んじゃって」

田ノ浦「あ、僕のかな」

宗之「タクシー呼ぶか」

和美「そうね」

雅人「あ、だいじょうぶです。ぜんぜん、歩けますんで」

宗之「いやいや、無理だって。照男、タクシー」
照男「うん」

通路（上手）へ行こうと。

雅人「あ、いいですいいです。ほんとに」

田ノ浦「斉藤さん」

和美「だめよ、そんな。（照男に）照男さん、お願い」

照男、通路へ消える。

太郎「そうですよ、大事とつたほうがいいですよ」

雅人「いや。でもあの。もしかして、食べてないからかな」

和美「え？」

雅人、苦笑して、

雅人「空きっ腹過ぎかも・・・しれないです」

太郎「ああ」＋宗之「あ、そう」

和美「お腹へってるの？」

雅人「いや、わかんないんですけど、そんな気もするんで」

太郎「あ、じゃあ」＋田ノ浦「ああ」

和美「ねえ」

雅人「あの、もし、なんか残ってれば」

和美「もちろん。消化のいいものがいいでしょ、今、いろいろ用意したとこだから」

雅人「はい。あれ、音楽・・・あ、すいません、みなさん」

太郎「いや、ぜんぜん」

和美「いいのいいの。でもほんとに大丈夫？」

雅人「ええ、すいません、大丈夫です、もう」

和美「そう・・・じゃあ、みなさんもお部屋にどうぞ。用意してあるから。甘い物もある

し」

太郎「あ」

田ノ浦「ああ、でも」

宗之（同時に）「うん。斉藤さん、うまいグラッパありますから」

太郎「あ」

はる子（同時に）「あもう、ほんとに。今日はこれで」

宗之「えでも、なんかやつとご機嫌になってきたじゃないの」

はる子「いえいえ、もうほんとに。ね」

太郎「うん、そうだね」

宗之「え、でもなんか残念だなそれは」

はる子「ええ、そうなんですけど」＋「太郎「ええ、ほんとにごちそうさまでした」

はる子「ごちそうさまでした」

宗之「そうお？なんか、これからって感じなのに。（はる子に）音楽の話とかもしたいしき」

太郎「ああ。ま、それはまた、今度また」

和美「でも、今、驚いた。あんな一心不乱に踊る女性、すごい久しぶり」

はる子「あ。は。お恥ずかしいです」

太郎（同時に）「ははは」＋田ノ浦「いや、最高でしたよ」＋宗之「ああ」＋雅人「はは」

和美「ねえ。長嶺ヤス子かと思っちゃった」

はる子「いえいえ」

和美「長嶺ヤス子ってまだ生きてるんでしたっけ」

宗之「え？いや、どうかな」

（はる子も含めて宗之以外、誰も長嶺ヤス子知らない）

和美「でも、せっかく、雅人さんも食べ直したいって言ってるんだし、あたしも」

雅人「あいえ、そんな、僕は」

和美「ううん、それにあたしもなんか、はる子さんとなんかへんなわだかまりを残してお別れしたくないし、ね」

はる子「あ、あたしは、もう、ぜんぜん、なんにも気にしてませんから」

和美「えでもそうは言ったってねえ」

はる子に「いえ、ほんとに。あたしの方こそ、なんか妙にこだわっちゃって」

雅人「でも、今、ずいぶん、発散しましたもんね」(笑)

太郎(笑)「まあね」+宗之「ねえ」+和美「ほんと、そうねえ」+はる子「あいえ、でも、今のは、発散ていうか、なんかよくわかんないものなんですけど」

田ノ浦「最高でした」

和美「でもほんと、ごめんなさいね、あたし、ほら、さっきの、川島さんの奥さんとちよつとほんとに、ウマが合わなくて、ほんと昔っからなんだけど(宗之「ああ」、だからちよつといらいらしてて)」

太郎「はは」

和美「ほんと、自分でももう少し、大人にならなきゃって、反省してます」

太郎「いえいえそんな」

和美「ただ、はる子さんの虫の居所がね、なんで少々悪いのかは、ちよつと推測できないんだけど」

はる子「え、あたし、別にそんな」

同時に、照男入ってきて、

照男「15分くらいかかるって。今、混んでるみたい」

雅人+田ノ浦「あ」

宗之「ああ」+和美「あ、ごめんね、タクシー要らなくなったの」

雅人「ほんとすいません、ごめんなさい」

照男「え、いいの？」

宗之「うん」+和美「うん、ちよつとそつちで食べて行くことになったから」

照男「あ、そうなんだ。もういいんですか」

雅人「ええ。もう。むしろ、ちよつと食べようかと」

照男「あ。あ、じゃあ、キャンセルしなきゃ」

雅人「すいません」

照男「いえいえ、ぜんぜん。ねえ、あのテーブルの、オレも食べていいの」

和美「え。あ、ぜんぜんいいわよ」

宗之「もちろん」

和美「なに、食べてきたんじゃないの」

照男「いや。なんか料亭なんてあんま食べれなくてさ」

和美「そう」

照男「うん」

と行って行こうと、

はる子「あ、じゃあ、そのタクシー、うちが乗りますから」

照男「あ、そうですか」

はる子「うん。ね」

太郎「あ」+宗之「え、でもさ」+田ノ浦「えー」

照男「あ、じゃあいいね」

太郎「あ、でも。そうだな。じゃあ、せつかくだから、ちよつと頂いていこうか」

はる子「え？」

宗之「そうだよ。それがいいですよ」

和美(同時)「そうよ」+雅人「ああ、よかった」

はる子「え、どうしたの」

太郎「いや、ちよつとね。そのグラッパにちよつと、後ろ髪をちよつと」

宗之「ああ、そう。そうこなくちや。ねえ」

田ノ浦「あ、じゃあ、僕もちよっといただいてよろしいですか」

宗之「ああ、もちろん」

和美「もちろんよ」

田ノ浦「なんかあつかましいようですが」

和美「なにおっしゃって(るの)、それじゃ、お部屋へどうぞ。今度は人口密度低いから、

あれですよ、ゆったり」

照男「じゃあ、キャンセルするわ」

和美「うん」(と言って下手へ)

太郎「あ、すいませんね、何度も」

照男「いえいえ。まだ一往復なんです。3回まで無料だから」

田ノ浦「ははは」

太郎(笑)「照男さん、面白いなあ」

照男、通路(上手)へ。なごやかの中、みんな、話しながら、通路(下手)へ

消えてゆく。(etc)

(田ノ浦「三菱重工つぼくないと思うなあ」

雅人「ああ」

田ノ浦「あれですか、照男さん、料亭っていうのは、接待かなんかですか」

宗之「そうかな。いや、何やってるかわかんないんだけどね」

雅人「でもほんと前途有望ですね」

宗之「どうだかねえ」

これにかぶって、一方、はる子が夫を引き止め、

太郎「なに」

はる子「ね、なんで」

太郎「なにが」

はる子「えだって、なんで帰らないの」

太郎「だって。んな。誘われたし」

はる子「そんなのさつきからずっと誘われてるじゃない」

太郎「そうだけど、うちだけ帰るのもさ」

はる子「なに言ってるの、ほとんどみんな帰ってるじゃん」

太郎「いや、だから、ほんとに専務に近い人たちとしては、」

はる子「ね、さつき、(見てたよね)」

太郎「これは立派な営業なんだから。(それぐらいわかるでしょ)」

はる子「ね、さつき見てたでしょ」

太郎「なに、なにを」

はる子「そこで。専務に」

太郎「なに」

はる子「あたしが専務にされてたこと、見てたでしょ」

太郎「見てないよ。踊ってたじゃない」

はる子「踊る前だよ。あたし、太郎くんが、専務があたしを触ってるとき、こっちを見た

のを見たよ」

太郎「なに言ってるん、見てないよ。そんなの見てたら言うよ」

はる子「うそ。完全に見てたよ」

太郎「見てないよ、だって彼と話してたんだ(から。就職のこと)」

はる子「なんで帰らないって言い出したの」

太郎「え？」

はる子「ねえ、なんで帰らないって言い出したのよ」

太郎「だから、言ったでしょ」

これにかぶって、照男がやってくる。バスタオルを手をしている。

照男「あれ」

太郎「あ」

照男「みんなもう飲んでますよ」

太郎「あ。今、行きます」

照男「ええ」

照男、反対側の通路へ行くこうとするが、立ち止まり、

照男「あ、もしよかったら次どうぞ」

夫妻「え？」

照男「あ、ちよつと汗かいちやつたんで、先にシャワー浴びちやうんで」

太郎「ああ」

照男「よかったら。はる子さんも」

はる子「あ、いえいえ」

照男(笑)「だろうけど。よかったら言ってください」

照男、下手の階段通路へ出ていく。

間。

太郎「とにかく行くこうよ」

はる子「合コンやったこと、なんにも言わないの」

太郎「合コン？」

はる子「さっき言ってた」

太郎「ああ。だって・・・頼まれたんでしょ」

はる子「あたし、黙ってたんだよ、いつもならもつとブツブツいろいろ言うじゃん」

太郎「だって、別に頼まれてやったわけでしょ」

はる子「やったこと黙ってたんだよ、前だったらもつとネチネチ言うじゃない」

太郎「ええ？なに、怒れって言うの？怒ってくれって言ってるの」

はる子「そういうことじゃ・・・いいよ、もう」

太郎「なんだよ、もう。とにかく行くこうよ、行くなって言っちゃったんだから」

はる子「・・・いい。あたし、もう帰る」

太郎「ハル。ちよつと、飲んで・・・帰るから。仕事の話もあるんだよ、次の仕事、競合に

なっちゃったんだから。言ったでしょ」

はる子「だから太郎残れば。あたし帰るから」

太郎「・・・だって、なんて言えばいいの」

はる子「気分悪くなつたとか。なんだかっていいじゃない」

太郎「斉藤さん見てみなよ、あんな何度も倒れてるのに、立派に立ち上がってさあ」

はる子「あの人はあの人でしょ、とにかく、もうここにいたくないんだよ」

太郎「なに言っ・・・いいじゃない、ちよつと触られただけでしょ」

はる子「見てたんじゃん、やっぱり」

太郎「違うって、ハルが触られたって言うから」

はる子「ちよつと触られるぐらいならいいんだ」

太郎「いや、そんなこと言ってないって」

はる子「だって、そういうことでしょ」

太郎「あのね、もう、なんなのよ、だいたい。今日おかしいよ、奥さんとあんなムキにな

ってさあ」

はる子「なに言ってるんの、あれはあの人がおかしいんじゃない、狂ってるやん」

太郎「狂ってるのは前からわかってるでしょ」

はる子「だって」

太郎「もうさ、そういうの我慢してくんなきゃ、営業の一環なんだから、これだってさ」

はる子「だってさっきだって、誰だっけあの、童貞っぽい人」

太郎「ええ？」

はる子の「トヨタの」

太郎「田ノ浦さん」

はる子「あの人のこと、あんなにいいじめてさ、意味なく。おかしいよ」

太郎「別に毎日顔あわせるわけじゃないでしょ、年に1, 2回じゃない、せいぜい」

この途中で、宗之がグラップルのボトルとそれ用のグラスを持って。

太郎「あ」

宗之「なんだ、探したよ」

太郎「あ、すいません、ちょっと」

宗之「ほら」

太郎「あ」

宗之「ね。はる子さんも」

はる子「あ、いえ」

宗之「ま、かけつけ一杯ってことで。ってなにかかけつけかわかんないけど」

と言いながら、グラスを太郎とはる子に。

太郎「あ、どうも」

はる子「あ、いえ、あたしもうほんとだめなんで」

宗之「まあまあまあ、そう言わずにさ、ね」

はる子「えー」

太郎「ま、一杯だけ」

宗之「そうだよ、はる子さんがそうとういける口だっていうのは、今日、わかっちゃった

もんね、と」

と言いながら、ふたりと自分のグラスに少量、注ぎ、

宗之「これはもう、一気にね。じゃあ、乾杯しよう、なに乾杯しよう」

犬の鳴き声。

宗之「ああ、犬が鳴いてる。すごい」

太郎「あ」

宗之「じゃね、やっぱり、そう。はる子さんの腕に乾杯だな」

太郎「はは」

宗之「じゃあ、その腕に」

宗之+太郎「乾杯」

3人、一気に飲む。

太郎「かー」(咳き込む)

宗之「くはあ・・・来るねー」

太郎「たはは」

宗之「香りもね。いいでしょ」

太郎「ええ」

はる子は平然としている。

太郎「いや、こんなの初めてだな」

宗之「すごいね、いいね、はる子さん」

はる子「いえ」

宗之「どれどれ、もひとつ」

はる子「あ、もうけっこうです」

宗之「ええ、いけるでしょ、っていうかいけてるじゃないの」

はる子のグラスに注ぐ。

太郎「あ」

十はる子「あ。じゃあ」

宗之「さあさあさあさあ」

太郎「いや、実はそれほど強くは」

はる子、一気に飲む。

宗之「あ、すごいね。いいね。うれしくなっちゃうねえ。よし、じゃ、もうひとつ」

太郎「あ、もう」

はる子「あ、もう、ほんとに」

宗之「まあまあまあまあまあ」

はる子「ああ」

はる子、一気に飲む。

太郎「おい」

宗之「ははは。いや、いいねえ」

太郎「だいじょぶか、おい」

はる子、うなづく。

宗之「うん。じゃ、なんかつまみながらさ」

リビングへ誘おうと、

太郎「あ。すいません、あのう。なんか、家内、ちょっと、どうしてもですね、帰らなく

ちやいけなくなりまして」

宗之「え、そうなの？」

この途中で和美がやってきて。手にはサクランボ。

和美「田ノ浦さんが寂しがってますよ」

太郎「あ」

宗之「でも、まだちょっといいじゃないの」

はる子「あ」

和美「田ノ浦さん、また泣いてんのよ。泣き上戸ね。(太郎「あ」)またシリアの話して。

シリアに親戚でもいるのかしら、あ、それね」

(宗之、ボトルを持っている)

宗之「ああ」

和美「どう？強いでしょ」

太郎「あ。でも、うまいです」

宗之「やっぱりすごい好評で、おふたりに」

太郎「ええ今、家内も」

宗之「そうそうそうそう」

和美「そう、よかった。あたしなんか、お酒弱いからぜんぜんだめなんだけど、ね、ここ

もう、冷えてきてるんじゃない？入りましょ」

太郎「ええ。ただちょっと・家内はここで。な」

和美「あ」

太郎「ええ、ちょっとこのへんで」

和美「あらそうなの」+宗之「んん」

太郎「ええ、すいません、申し訳ないです、せっかくのあれなのに」

宗之「ねえ」

和美「でも、あなたは、だいじょぶなんですよ？」

太郎「あ、僕は、あつかましくも、まだもうちょっと」

和美「あ、そう」

宗之「でも、はる子さん、今、クイックイツといってねえ、なんか飲み足りない感じなの

にねえ」

太郎（笑）「いやいや」
はる子「じゃあ、今晚だけならいいですよ」

宗之「ん」+太郎「え」
はる子「ええ」

太郎「え、なに？」
はる子「・・・片腕を、一晚お貸ししてもいいわ」

宗之「え？」
太郎（笑）「なに言ってるんの」

和美「えなに？」
はる子「専務がさつき、あたしにそうおっしゃったんで」

太郎「え」
宗之「あ。川端のね」

はる子（首を振って）「専務、あたしにおっしゃったじゃないですか。そこで」
宗之「ええ？」

はる子「つい、今。そこで。今晚、これを貸して欲しいなって」
和美「はああ」

宗之「・・・や」
はる子「もしあれだったら、片腕だけでなくでもいいですよ。両腕でも。足でも。首でも」

と喋って笑う。
太郎「ハル、なに言ってるんだよ」

宗之「はは」
太郎「今ので酔っ払ったんだろ」

宗之「ああ、そうだね」
はる子「酔ってないよ」

太郎「酔ってるよ」
はる子「あ。主人の仕事のことで、便宜を、はかる？（って言うの？）」

太郎「え？」
はる子「よくしていただけるなら、からだでも。からだ全部でも、いいですよ」

太郎「ば、なに言ってるんだよ」
和美「あらやだ。あなた、よかったじゃない。夢みたいね」

宗之「何、言ってるんの、そんな、はる子さんね」
太郎「はる子、失礼だろ、そんな。すいません」

和美「えなに、そこで言ったって、いつ？あたしがいないとき？」
はる子「あ、奥さまはお部屋にいてて、いなかったような気がする」

和美「あ、ついさつきね」
宗之「いやいや、そんなことは言っていないでしょ、僕。ねえ」

太郎「ええ、もちろん。おっしゃってないですよ、そんな」
和美「絶対言ってるわよ、それ」

宗之「なにを言」
はる子（同時）「はい」

太郎「か」
和美「ね、言ってるわそれは」

宗之「なに言、そんな失礼なこと言うわけないでしょうが」

これにかぶって、照男がシャワー後のいでたち（タンクトップにバリ風の膝丈のパンツ等）でやってくる。
照男「あれ、まだ（いるの）」
太郎「は」

和美「なに、けっこうちゃんと食べたいの？」

照男「うん。さつきあったのでいいよ、なんかエビのサラダみたいなやつとか」

和美「ローストビーフもあるわよ、トロワグロの」

照男「うん、食べる食べる。え、何してんですか」

太郎「あ。いや。今、グラッパを」

宗之「ああ」

照男「・・・あ、僕もちよつと飲もうかな」

太郎「あ」

和美「あなた、そんなの飲めないでしょ」

照男「うん。弱いんで。でもちよつと」

宗之「はる子さんはね、今、一気に3杯」

和美「え」+照男「えー」

宗之「かけつけ3杯」

はる子(笑)「あたしもそんなに強くないですよ」

照男「いや、強いのはよく知ってるけど、なんかグラスある？」

和美「あ」

太郎「あ、じゃあ、これ」

自分のグラスを差し出す。

照男「あ、じゃ」

太郎「あ」

照男「あ、いいですいいです、自分で。なめるだけなんで・・・こんなもんで(と言って飲

む)・・・ああ、こりゃ。ムリムリ」

みんな反応。なごやか。

+和美「ほら。だから言ったのに」+太郎「ねえ」+宗之「弱いんだよ」

照男「いや、ハルさんすごいね」

太郎「だから、もう酔っ払ってますよ」

照男「そうなんだ」

太郎「ええ。今、ぐびぐび」

照男「ああ」

はる子、ふふと笑う。

和美「なんか、上に着なさいよ」

照男「え？今、よけい暑くなっちゃったよ」

和美「風邪ひくわよ」

はる子「今、あれしたんですよ」

照男「え？うん」

はる子「お父様に、あたしの腕を、今晚、お貸ししますっていう提案をね、してて」

照男「え？」

太郎「おい」

照男「なにそれ。なんかさつきからなんなの、その腕って」

はる子「お父様にさつき頼まれたんで」

太郎「ハル」

宗之(同時)「だから、そんなこと」

はる子「ね、聞こえなかった？さつきそこで、お父様があたしに、今晚これを貸して欲し

いなって」

これをさえぎるように、

太郎「ハル、だから。なに言ってるの」

+宗之「いや、そんなこと言ってるないでしょって、もう」

照男「ああ、さつきね。なんか一瞬間こえたな」

はる子「ほらね」

照男「フフフ。あれそうか」

はる子「そう」

照男「あ、それでダンスか」

はる子、うなづく。

照男「そっか。なんだ・・・そんなしつかりした理由があったんだ、今のダンス。もつとイミフっていうか、シユールなのかと思つてかつこいいなつて思つたのに」

はる子「ふふ。ごめん。普通なんです」

照男「なんにでも理由があるもんだよね」

間。

宗之「照男」+和美「照男さん」

照男「えなに、今、提案したつて言つた？」

太郎「あ。ええと」

はる子+「あ。ええ」

照男「え、はるさんが？今？」

はる子、うなづく。

照男「え、ごめん、なにを提案したつて？」

はる子「だから腕を。今晚。頼まれたから。でも、それ以外のものでもいいですよつて」

太郎「いや、だからなんかさういう、それはですね」+「いやいや、頼んでなんかいないじゃないの」

和美「だから、はる子さん、酔つ払つてからかつたんでしょ。あなたも、はる子さんの言うこと、いちいち真に受けなくていいんだから。ちよつとからかつただけなんだから。(太郎に)ねえ」

太郎「あ。ああ」

照男「からかつた。あ、なに父さんを」

宗之「そんな別に」

和美「ええ、あとあたしも。ご主人のことも。みんな」

照男「ああ。なんだかよくわかんないけど」

はる子「・・・え」

太郎「あ。ま、でも酔つ払つて。ねえ」

照男「あでもはる子さん、さういうところあるよね。人のこと困らせて喜ぶつていうさ、すぐく・・・道徳的にも優れたつていうか、特質つていうの」

はる子「あたし、普通ですよ、ぜんぜん。からかつてなんか・・・え、奥さまは・・・なんとも思わないんですか・・・あの。今の」

和美「え、なに？」

はる子「あ、ごめんなさい、いいです」

和美「なに」

はる子「いえ」

和美「あ、今の。なんとも思わないわよ。あたしが怒るつて思つたの？だつて、主人のいつもの・・・あれでしょ。冗談で言つたんでしょ？」

宗之「え？」

和美「え、本気で言つたの」

宗之「え、なにを」

和美「だから、そのはる子さんに言つたつていう」

宗之「ああ・・・いや、だから言つてないよ」

和美「だから冗談で言つたんでしょ、テラスで言うならこれみたいな」

太郎「いや」

宗之「いや、なに言つてんの、そんなこと言つてないつて」

和美「いい加減にしてよ。そんなしらばっくれるんだったら、はる子さんの思う壺じゃない」

宗之「なに言

和美(夫妻に)「あ、ごめんなさい(笑)」

宗之「まったく」

照男、笑う。

はる子「思う壺って」

太郎「いや。ええ。僕もそれは、冗談だと思ってますよ」

宗之「いや、だから僕はなんにも言っていないって」

太郎「あそうだ、言っていないんです」

宗之「ああ」

太郎「・・・あれ」

はる子「おっしゃいましたよ、だから」

太郎「おい」

照男「ま、おっしゃいましたよ。こちらは(宗之を示し)。いかにも言いそうなことだもんね」

和美「照男さん」

宗之「だから上になんか着なさいって」

照男「そのうち谷崎の話が出てくるから・・・谷崎潤一郎。知ってる？」

はる子「あ、さっきなんか」

照男「あ、もう出た。ま、こちらのパターンですから。谷崎と佐藤春夫の、昔のなんかス

キャンダル話が出てきますよ、あ、それはもう出た？」

はる子「ううん」

照男「じゃあ、そのうち出てくるから」

宗之「照男、お前なにが言いたいんだ」

照男「別に、言いたいことなんかないよ、お父さんの行動パターンをこちらにちよつと、

教えて差し上げるだけなんで」

和美「なに言ってるの、やめてそんなこと」

宗之(同時)「そんなモノあるわけないだろ。あることないこと、人様に言うもんじゃないよ」

太郎「ま、照男さん」

照男「ま、簡単に言うと、先月うちに遊びに来た同じサークルの国文科3年、遠藤ミカサ

ん21才をうちのお父さんは、オレがちよつと目を離してるスキに、さんざんくどいた

っていう、ま、そういう話があるっていうね」

宗之「そんなことするわけないだろ、いい加減にしなさいって、上着着ろ」

照男「だって、ほんとだもんね、お母さんもちゃんと見てたんだから。ねえ」

和美「・・・」

照男「ま、その遠藤ミカさん21才の卒論は、源氏物語なんだけど、源氏の解釈やら谷崎

やら三島の話で盛り上がって、いろいろ口説いたあげく、」

宗之「いいよ、もう、やめなさい」

照男「あげくですよ、そのあとやっちゃったらしいっていうね」

和美「照男さん、やめて」

宗之(同時)「そんなことあるわけないだろ」

照男「でも聞いたよ、やったって。書齋で」

宗之「やってません」

照男「やったって言ってたもん」

宗之「やってません」

照男「あのね、ミカちゃんはそういうことで嘘なんか言うセンス持っていないからね」

和美「これをさえぎって、

和美「いい加減にしてよ。なにそれ。お客様の前で」

宗之「・・・こそ」

はる子、笑う。

太郎「おい」

はる子「ごめんなさい。だって」

照男「ま、いいんだよ別に。オレなんとも思っていないから」

はる子「あ、ごめんなさい」

照男「あ、違う違う。そのサークルの子」

はる子「え？」

照男「ミカちゃん。別にオレ、つきあってたわけじゃないから」

はる子「あ、そうなんだ」

照男「うん。向こうが勝手に」

太郎「ああ。照男さん、もてますもんねえ」

照男「いえいえ」

太郎「合コンでも一番人気だし」

照男「はる子」・・・」

和美「ええ、ほんと。女性だけじゃなくて会社からもね。面接受けがずいぶんいいみたい

で。昔つから。幼稚舎の受験もそうだったし」

照男「ふふ。僕、面接って好きなんですよ。完全に演技の世界だし」

宗之「もてるのはいいけど、できたら女だけにしてみたいね」

はる子「・・・え」

照男「なんだよそれ」

宗之「・・・あ、いや」

和美「あ、そうだ。あたし、ご主人にお願いがあるんですよ」

太郎、照男を見て聞いていない。

和美「ご主人」

太郎「あ。は？」

和美「今度のお花の会のパンフレット作っていただけないかしら」

太郎「あ、パンフレット。ええ、喜んで」

和美「あ、よかった。じゃあ、ちよっと待って、去年の取ってくるから」

下手へ行こうと。と、田ノ浦、が来ていて、

和美「あ」

田ノ浦「あ」

和美「田ノ浦さん」

田ノ浦「あ、やっぱみなさん、ここですか」

宗之「あ、すいませんね」

田ノ浦「なんだあ」

和美「あ、ごめんなさいね、あたし、呼びに来たのに」

田ノ浦「いえいえ。ぜんぜんいいんですけど・・・ただ、みんなでまたとりとめのない建設

的なお話をね、さつきみたいにするのかと思ってたんですけど」

太郎「宗之「ああ」

和美「今、向こうへ移りますよ。ね」

宗之「ああ」

田ノ浦「ええ。甘いプディングとかもあるし」

和美「ああ。あれおいしいでしょ」

田ノ浦「はい。おいしかったです。あんな大きなプディング、初めてで」

和美「あれ、あたしが作ったんですよ」

田ノ浦「えー、それまじすごいです、ほんとに驚きました」

和美「ありがとう。あ、雅人さん、食べてる？」

田ノ浦「あ、そうなんですよ。で、斉藤さん、ちょっとワインとかも飲んだら、なんかやっぱりよくないみたいで」

和美十太郎「え」

田ノ浦「ええ、今、ソファで横になってるんですけど」

和美「あらやだ」十宗之、照男、はる子「え」

田ノ浦「いや、ご本人は少しこうしてればだいじょぶだって言ってるんですけど」

太郎「ああ」

田ノ浦「しかし、あの広い部屋で僕とソファに寝てる人と、それだけの世界が構築されてしまったんで、ちよつとさすがにですね、どうしたものかと」

このセリフの途中で。

和美「やっぱりいけなかったのかな」

と言っ、出ていく。

田ノ浦、グラスパのボトルを見て。

田ノ浦「・・・これね。さっき僕もいただきました」

宗之「うん」

田ノ浦「強烈で」

太郎「はは」

田ノ浦「あ、飲まれました？」

太郎「ええ」

田ノ浦「はる子さんも」

はる子「あ、はい」

田ノ浦「あ、はる子さん、強いすもんね」

太郎「ええ」

宗之「だいじょぶかな、ちよつと見てこよう」

宗之、出ていく。

田ノ浦「あ」

太郎「あ」

田ノ浦「・・・いやあ、でも、夜はなんだか」(座る)

太郎、立ち上がり、行こうとするが、また座る。

照男「オレ、斉藤さんと、2回、(太郎が反応するので)ああ、あっちにいる」

太郎「ああ」

照男「2回しか会ってないんですよ。太つてるときと、今晚と」

田ノ浦「あ、僕もそうですよ」

照男「あ、そうですか。なんか、すごいヘンな気がしません？」

田ノ浦「へん」

照男「なんていうの、イメージが作れないって言うか、だってビフォー&アフターの2回だけだから・・・どっちもリアルじゃないっていうか嘘っぽいっていうか」

田ノ浦「ああ」

照男「ほら、ダイエットのCMとかの、ビフォーアフターってめちゃくちゃ嘘っぽいじゃないですか」

太郎十田ノ浦「ああ」

田ノ浦「ええ、全部あれですよ、デジタル処理っぽいですよ」

照男「ねえ。だから・・・斉藤さんなんか、どっちも本人じゃないような、っていうか、実体がない感じ」

田ノ浦「確かに。ヘンだ。ヘンですね。なんか、だまされてるっていうか」

照男「そうそう」

田ノ浦「そもそも斉藤さんと言う人はいたのか、みたいな」

照男「ねえ」
田ノ浦「ええ」 十太郎「はは」
照男「ま、そこまでじゃないけど」
田ノ浦「でも、ほんとは斉藤さんじゃなくて、田中さんと山本さんだったらどうしよう。
ええー」
照男「ああ、なるほど。ねえ。ま、そんな感じ・・・え、でも斉藤さんは？ 斉藤さんと親し
いんでしたっけ？」
太郎「あ、ま、親しいっていうほどじゃないんですけどね、でもこんなだったとき、何度
も会ってるんで。ねえ」
はる子「あ。うん」
太郎「だから、僕なんかは太ってるイメージが強いから・・・ま、ちょっと痛々しいって
うか」
田ノ浦「ああ、前のイメージが強ければね。ええ。ま、問題ないですよね」
太郎「あ、まあ」

間。

はる子「あたし」
田ノ浦(かぶって)「あ。はる子さん、それ(グラス)、空じゃないですか。なにか」
はる子「あ、いえ」
田ノ浦「そうですか。でも」
はる子「あの、あたし、もう帰るんで」
田ノ浦「え」
照男「そう」
田ノ浦「あ、そうなんですか。それは残念至極といいますが、超残念系の極みっていうか」
はる子「でも、いいかな？」
照男「え？」
はる子「あれ、最後に、ちょっとだけ」
照男「ああ」 十田ノ浦「あ、やつぱり」
太郎「ハル、飲み過ぎだよ」
はる子「うん」
はる子がグラスを取り取る。それより先に照男が瓶を取る。
はる子「あ、すいません」
照男「これじゃ小さいんじゃない？ ジョッキでも持ってくる？」(彼女のグラスを受け取り、
注ぐ)
はる子(笑)「いえいえ」
照男「はい」
はる子、照男にキス。
田ノ浦「あ」
照男「ちよつと、ハルさん」
はる子、太郎を見て、田ノ浦を見る。
照男「なに、どうしたの、面白いことするね」
この途中でもう一度キス。
照男、笑い、消えている。はる子、太郎を見る。はる子、「ありがとう」と言っ
てグラスを受け取り、飲み、「ごちそうさま」と言っ
てグラスを照男に渡し、
玄闈へ。
照男「あ・・・ええと。あれ？(太郎に) え、どうすんですか」
太郎「・・・」

照男「え、じゃ。え、ちよつ、」(玄関へ)

(玄関では OFF)

照男「ちよつと待ってよ、送ってくから」

はる子「あ、いいいい。大丈夫」

照男「クルマで送るよ」

はる子「照男くんが？お酒飲んでるじゃない」

照男「たいして飲んでないもん」

はる子「ううん。いい、ほんとに」

照男「いやでもさ」

はる子「ほんとほんと、いいの」

照男「じゃ、タクシー呼ぶから」

はる子「通りまで出ればつかまるから」

照男「いや、今、仕事やってるからずつと。捕まんないよ」

はる子「だいじよぶだよ、歩くから」

照男「でも、捕まんないって、ほんとに」

はる子「いいのいいの、歩きたいし」

この途中で太郎、玄関へ来る。

太郎「ハル・ちよつと待って。帰るから」

はる子「いいよ。だって営業するんでしょ」

太郎「そんなことないよ」

はる子「いいよ、先に帰るから」

太郎「ちよつと待ちなさいって」

はる子「帰りたいんだよ。言っただじゃん」

太郎「だから、今、挨拶してから」

はる子「いいよ」

太郎「よかないよ」

はる子「いいって」

照男「ハルさん」

太郎「ちよつと」

はる子「痛い、やめて」

太郎「ハル」

はる子「離して」

ドアしまる音。

太郎「・・はあ」

照男「え、いいんですか」

太郎「・・ま、専務に挨拶しなきゃ」

照男「え、そんなの」

太郎「・・」

照男「え、なんですか」

太郎「あ、いえ」

(一方、この間、舞台での田ノ浦、涙ぐんでいる。

田ノ浦「・・」

太郎が玄関へ行ったあととも田ノ浦はそのまま。)

ドアの音が閉まると、和美がやってくる。

和美「あら、みなさんは？」

田ノ浦、見る。

和美「(ん?)・・・あ、また泣いてるんですか」

田ノ浦「あいえ」

和美(笑)「でも泣いてますよね、それ」

男ふたり、玄関から戻り、

照男「ん」

和美「ああ」

照男「なに笑ってんの」

和美「え。あ。ううん・・・(息子と太郎を見て)え、どうしたの」

照男「あ、はる子さんが、今、帰りましたー」

和美「え。あ、そう」

照男「うん。ご夫妻によるしくお伝えくださいって」

和美「あ、そう。直接言ってくればいいのにね」

太郎「すいません、ほんと」

和美「ううん。ぜんぜん。いいんですけど」

太郎「すいません」

和美「・・・あ、ええと・・・あ、そう。雅人さん、よくなったみたいだから」

(和美は目の前の泣く男のせいで用件を一瞬忘れたのだ)

照男「あ、そう」+田ノ浦「あ、そうですか」

和美「うん、お酒飲んでる。斉藤さん、来てあげて。一緒に」

太郎「あ、はい」

和美「さっきの打ち合わせもしたいし」

太郎「あ」

和美「田ノ浦さんも・・・ね、また泣いてるのよ。今度はなんの話？」

田ノ浦「いえいえ、別に」

和美「そう？」

田ノ浦「いえいえ。あの、でも。僕もそろそろ」

和美「え」

田ノ浦「ええ、おいとましようかと」

和美「あら、やだ」

田ノ浦「すみませんけど」

和美「でも、斉藤さん、話したがってるから」

田ノ浦「あ、ええ、ま、ちよつと挨拶して」

和美「うん」

田ノ浦(太郎、照男に)「あ。ええと。じゃあ。どうも」

太郎「あ、どうも」+照男「あ」

田ノ浦「・・・ええと」

和美「ん？」

田ノ浦「あの。さっきのは、どういうふうに解釈すればいいんでしょうか、みたいなこと

をちよつと教えていただければ」

言い出したところで、宗之がやってくる。

宗之「ああ」

和美「あ。今」

宗之「うん。あれどうしたかな、去年の箱根の写真」

和美「箱根の？客間のあるでしょ」

宗之「いや、ないんだけど。あれ？(太郎に)はる子さんは？」

太郎「あ、すいません、ちよつと先に帰りました」

宗之「あ」

太郎「すいません、専務に挨拶しろって言ったんですけど、なんか急いでて」

宗之「あ、そう。なんだあ」
太郎「すいません、勝手に」

和美「ねえ、残念ね」

宗之「ま、確かに、なんか急いでたしな」

太郎「は。まあ」

宗之「そっか・・んん」

田ノ浦「あの、僕もそろそろこのへんで」

宗之「え」

田ノ浦「ええ」

宗之「ああ、そうですか」

田ノ浦「はい。ごちそうさまでした、ほんとに」

宗之「あれ、でも、なんか、今、斉藤さんが、あなたになんか」

田ノ浦「あ、はい。じゃ、ちよつと」

と言つて、奥の部屋へ。

宗之「ああ・・んん。でも、そうか。はる子さん・・せつかくあんな」

和美「あんななんですか」

宗之「え？いや。いいんだけど・・でも突然だよねえ」

太郎「ええ、ほんと。あの、今度、また改めてご挨拶にまいりますんで」

宗之「いやいや、それはいいんだけど」+和美「そんな、いいですよ」

宗之「ま、でも、そうか・・そうね。ま。なんか、急いでたもんね」

太郎「あ。はい」

宗之「ねえ」

和美「ううん。ほんとに急いでたらグラップ3杯も飲まないでしょ。誰かさんが暴露したから、身の危険を感じたんじゃないの」

和美、言いながら下手へ消える。

照男（ムツ）「ええ？」

宗之「なんだよ、それ」

和美「ちよつと、こつち手伝ってください」

夫は息子たちを一瞥し、言いながら妻を追う。

宗之「あ。なあ。じゃあ、写真はいいよ」

和美（声）「なんの」

宗之（声）「だから箱根の」

和美（声）「ああ、どうせコンペの優勝、自慢したかったんでしょ」

宗之（声）「違いますって」

間。

照男「あの。ちよつと」

太郎「ん？」

照男「あの、ちよつと言つておきたいんですけど」

太郎「うん」

照男「・・ええと」

太郎「うん」

照男「あの・・オレ、はる子さんとなんにもないですから。ほんとに」

太郎「ああ。いや、それは。ええ。ま、正直最初は・・ちよつと思いましたが」

照男「あ、そうなんだ」

太郎「ええ。そりゃあ、やっぱり」

照男「ああ。ですよ」

太郎「ええ」

照男「ま、でも、よかった。そんなら」

太郎「ええ、ぜんぜん、今は。もう、疑ってもいいですよ」

照男「あ、じゃあ、よかった・・・だから、なんて言うの、さっきのはちよっと太郎「ええ？」

照男「あ、はる子さんの、今の」

太郎「ああ」

照男「キスって言うか」

太郎「ああ。ええ」

照男「ええ・・何だったのか、よくわかんなくて」

太郎「ああ、そうね」

照男「ええ・・・なんですかね、あれ」

太郎「いや、僕も。まあ、僕への、なんだろう、あてつけみたいな」

照男「あてつけ・・・え、なに、あの。うまくいってない？」

太郎「あ」

照男「おふたりが」

太郎「いや、まあ。そう・・ま、ストレスっていうか、だいたい、今日ここに来るのもね、さんざん駄々こねて、ああ、でもいいな、この筋肉」

太郎「照男の腕を触っている。」

照男「え、なんですか」

太郎「いやいや、ほんとにほんとに。これね」

照男「ええ？」

太郎「ほら、こんな、しなやかで」

照男「いやいや、僕なんかもう、ぜんぜんあれですよ、生つちよろいだけだから」

太郎「なにおっしやいますか」

照男「ええ？」

太郎「なにおっしやいますか、ほら、力入ると、ここがこう、ピクッて」

照男「あ、ちよつ、痛いっすよまじ」

太郎「うん。うん。でもあれだよ、今日、ほら、腕の話、ずいぶんしたじゃない」

照男「あ、うん」

太郎「でも、僕なんかあれだな、さっき照男くん見たときから、腕なら、もう文句なく、一番はこれでしょう。ずっと思ってたよ」

照男「いやいや、そんなことないですよ、実際はる子さんのほうがぜんぜんきれいだし」

太郎「いやいや、はる子は、もうあれ・・・なんていうの・・白いだけだから」

照男「いや、でも僕のなんか、えだって、それだったら、斉藤さんの腕、見せてくださいよ」

太郎「僕の？」

照男「ええ」

太郎「あ、いいよ」(上着を脱ぎ、シャツを脱ぐこうと)

照男「あ。あ、いいですよ、やっぱ」

太郎「いや、いいよぜんぜん」

照男「いやいやいや、ここで脱いでどうすんですか」

太郎「え、そう」

照男「ええ」

太郎「でもちよつと、見てもらいたいな」

照男「いや、じゅうぶんわかるから。わかるから言ってるんで」

太郎「ま、じゃ、今度また」

照男「ええ。ま、でも、とにかく、僕の腕なんてそんな上等なモンじゃないし(太郎「うん」)、斉藤さんに褒められるようなモンじゃないと思うし、っていうか、逆に、ほんと

は斉藤さんみたいにカラダもつと鍛えなきやって思ってた」

太郎（さえぎって）「あ、ちよつとごめんね、ああ、やっぱり」

太郎、照男の腕の匂いを嗅ぐ

照男「あ」

太郎「うん、匂いもいい。うん。なんていうのかな、ちよつとオリーブの香りがする。うん。（くんくん）」

照男「ああ」

太郎「これだな、これ・・・うん。こつちも？・・・ああ、おんなじオリーブ・・・ああ」
太郎、照男にキスする。

太郎「ああ、ごめんね」

照男「・・・あの。ここじや、ほんとやばいんで」

太郎「あ。ああ、ごめんほんと」

照男「場所、変えませんか」

太郎「え、今？」

照男「ええ。だって・・・そりや、今でしょ、やっぱ」

太郎「え、変えるってどこ。（小声）どっかホテル？」

照男「いやいや、そこ。上で」

太郎「あ。その、例の書齋？」

照男（笑）「まさか。オレの部屋ですよ。（太郎「あ」）客間から一番離れてるし」

太郎「あ、そう」

照男「ええ」

太郎「あ、部屋ね、君の」

照男「ええ。あの、ちよつと先、行ってるんで、パツと片付けたいから」

太郎「え、いいいいいよ、片付けなんて」

照男「いや、ちよつと、ちよつと待っててくださいよ、あ、じゃあ、シャワー浴びててよ」

太郎「あ、シャワー」

照男「うん。廊下の一番奥」

太郎「え、いいの」

肯いて、照男、階段を上がる。

太郎、階段を行こうとするが、戻り、グラッパをラップ飲みし、むせ、わけのわからない叫び。

太郎「はあああ。×××××」

太郎「よし」

と、上に行こうとすると、上手に和美がいる。（手にパンフレットを持っている）

和美「どうしたんですか」

太郎「あ」

和美「どうしたの」

太郎「いや・・・あ。今、犬が」

和美「犬」

（はだけているシャツを直し）

太郎「あいや。わかりません。なんかすいません、今、お酒また飲んだら、ちよつとあれです、気持ち」

和美「気持ち・・・昂ぶたかっちゃった？」

太郎「あ。ええ」

和美「あら、照男は？」

太郎「あ、えーと。今、どっかへ」

和美「そう」

和美(笑って)「あの。さっきあたしも」

太郎「は」

和美「あなたに、ほら」

太郎「え」

和美「ここで。襲われそうになったとき」

太郎「ああ」

和美「すごい昂ぶっちゃいましたよ」

太郎「いえいえいえ、あれは、襲うなんてそんなんじや」

和美「ううん」

太郎「あれは、あれです、あの・・ハルが、家内が妙にこだわるから」

和美「あれ、はる子さんに言われたから？それであたしを襲ったの？」

太郎「いやいや、襲ったなんて。えだって奥さまも、お見せになるの、すごく嫌だっておっしゃったから」

和美「和美和美和美」

太郎「ん」

和美「和美」

太郎「ああ。和美さん」

和美「・・今もね、向こうで、田ノ浦さんが、また難しい話、あ、あの人、おいとましますって言ったのに」

太郎「ええ」

和美「でも、またなんか難しい話はじめちゃって」

太郎「ああ」

和美「うん。その間、あたし、ずっと考えてたんですよ、さっき、あのまま太郎さんに、だから・・みんながいる前で・・そのまま襲われてるあたしを・・想像しちゃって」

太郎「ああ・・なるほど」

和美「だから、田ノ浦さんに今なんか、どう思います？ってふられたんだけど、まったく聞いてなかったから、今、すごい困っちゃって」(笑)

太郎「ああ」

奥からかすかに笑い声(宗之、田ノ浦、雅人)

和美「あ。ごめんなさい、ええと・・これが去年の」(パンフレットを出す)

太郎「あ、これね。お花の会」

和美「ええ」

太郎「ええと。じゃ、詳しくは、どうしましょう。ええと・・じゃ、あとで」

和美「ええ。今日はもう遅いんで、日を改めて、どこかで」

太郎「あ、そうですね」

和美「明日でいい？」

太郎「あ、明日」

和美「ええ、お昼でも食べながら」

太郎「ああ」

和美「ね。西麻布とかで」

太郎「あ、わかりました」

和美「あとでメールしますから」

太郎「あ、はい・・了解です」

和美「・・あ、そうだ」

太郎「はい」

和美、太郎の手を取り、

和美「指出してくれますか？」

太郎「え？」

和美「指。そう、これこれ」

太郎「あ」

和美、太郎の人差し指を舐め、自分の胸の谷間に入れる。

太郎「あ」

和美「さっき、聞いちゃったから」

太郎「え。ああ、さっきの。はは」

和美「ね」

和美、部屋へ行こうと。

和美「明日のお昼、個室のいいお店があるんですよ」

太郎、動かないので、

和美「ん。行きましょう」

太郎「あ」

和美「ん？」

太郎「あ・ちよつとです」

和美「うん」

太郎「あの。あ、ちよつとシャワーを使わせて頂ければと」

和美「シャワー。あ、それで、今」

太郎「ええ、さっき、照男さんにどうぞって言われて、あと、さっきのダンスでちよつと

汗かいちゃったんで、さっぱりしたいかなみたいな」

和美（かぶって）「ああ、どうぞどうぞ。こっちはです」

太郎「あ」

和美「着替えは？照男のがいくらでもあるし」

太郎「あ、だいじよぶです、それは」

和美「じゃ、タオルだけでいい？」

太郎「あ、はい。すみません」

和美「やっぱりタオルは今治（いまばり）のが一番いいわよね」

太郎「ああ」

和美「こちらです」

太郎「あ、すみません」

ふたりが上に行き、しばらく誰もいない舞台。

と、雅人が宗之と田ノ浦にかかえられて。

田ノ浦「だいじよぶですか」

雅人「はい」

宗之「どこ座る」

雅人「風が、こう、通る方が」

宗之「じゃ、あそこに」

雅人、息も荒く、なんとか歩いて座り込む。

雅人「ああ・・ああ。でも既に・・・だいぶよくなったんで」

田ノ浦「ほんとですか？」

雅人、息、荒い。

宗之「やっぱりお酒、良くなかったんじゃないの？」

田ノ浦「そうですよ。お肉やフライも召し上がってたし」

雅人「いや、でも、お腹はなんともないんですけどね・・・ただ、なんか暑くて」

和美が降りてきて、

和美「あら」

田ノ浦「あ」

和美「え、こっちに？」

雅人「ええ」

宗之「今、またおかしくなったんだよ」

和美「え。だってさつきあんなに」

宗之「うん。今、急に」

和美「ええ？」

雅人「あ、でも、もう、だいじよぶですから」

和美「だいじよぶなの？ほんとに」

雅人「ええ。なんか急に暑くなって・・・でも、今ここ来たら、ずいぶん楽になりました」

宗之「そう？」

雅人「ええ。あ、みなさん、座りましようよ。なんか病室みたい」

宗之「はは」

田ノ浦「でも斉藤さん、強いですよ。すごいな」

雅人「いやいや・・・でも、ここ、ひやっとして気持ちいいんですよ、ほんと。楽になった」

宗之「あ、そう」

田ノ浦「ああ」

雅人「ええ。すいません。もうすっかり、元気ですから」

和美「でも、顔色、真つ青だし・・・一応、病院行きましようか、どこか救急の」

雅人「いやいや、そんなせんせんもう、だいじよぶです。ちよっところうしてれば。薬も

ちやんと飲んでるし」

和美「そう？」

雅人「ええ・・・でもそうか、真つ青ですか」

宗之「んん」

雅人「化粧、取れちゃったんだな」

和美「化粧？」

田ノ浦「ああ。なんでしたっけ、ファンデーション」

雅人「ええ」

和美「あ、そうなの」

雅人「ええ」

宗之「ああ」

間。

雅人「でも、あれですね・・・やっぱりみなさんと一緒に、ちゃんと飲み食いしたいですわ」

宗之「ああ、そりやそうだよ」

田ノ浦「ええ」

和美「あの、厚かましいあれですけど・・・お願いなんですけど」

宗之「うん」

雅人「来年は、わたし、そうとう回復してるはずなんで、またこれに、呼んでいただけますか」

宗之「ああ、もちろん」

田ノ浦「あ、じゃ、僕もお邪魔していいですか」

和美「田ノ浦さんはだめよ」

田ノ浦「え」

和美「嘘よ」

なごやか。

和美（雅人に）「来年は、ぜひ奥さまと一緒にね、いらしてください」

宗之「うん」

雅人「あ。ああ、実は去年、離婚しまして」

和美「え？」

宗之「あれ、そうだった」

雅人「ええ」
田ノ浦「ああ、さっきなんか」
雅人「あ」
和美「知らなかった」
雅人「すいません、言いそびれて」
宗之「あ、そう。去年」
雅人「ええ。ま。だから、今、道で会ってもオレだつて気がつかないと思うんですけどね。
あ、別れたかみさん」
宗之「ああ・ま、道で会うことはないけどね、まず」
雅人「ええ」
和美「あ、じゃお子さんは？奥さんが？」
雅人「ええ、向こうが。あ、あいつもオレのこと、わかんなかったら、ちよつとイヤだけ
ど」
和美「・・・そう」
雅人「ま、そういう。へへ。だから、次はひとりで」
田ノ浦「・・・あの、じゃあ」
和美「ね、ここ冷えない？」
宗之「うん、ちよつとね」
雅人、荒い息。
宗之「向こう、戻るか。行ったり来たり。はは」
雅人「あ、いやいや、ここで。この方が」
和美「あ、じゃあ、なんかかけるもの」
宗之「うん」
和美「あ、なんだつたら、今晚泊まっていけばいいから」
雅人「いえいえ、そんな」
和美「ぜんぜんかまわないから」
和美、行こうと。
田ノ浦「あ。あの。それじゃあ、僕、お先に」
宗之「ああ」+和美「あ、そうですか」
田ノ浦「ええ。斉藤さん。じゃ、お先に」
雅人「はい」
田ノ浦「今日はほんと、楽しかったですよ」
雅人「ええ、こちらこそ。また。次会うときは・・・あれです。今度は逆に、太って」
田ノ浦「ああ。逆に太ってて、またわかんなくなつちやうみたいな」
なごやかな笑い。が、雅人は無言。
田ノ浦「それじゃ。どうも」
宗之「うん」
田ノ浦「えー。あれ。ええと。斉藤さんは？」
雅人「は」+和美「あ」
田ノ浦「あ、じゃなくって」
宗之「ああ」
和美「あ、シャワー使ってるの今」
田ノ浦「はあ」
宗之「あ、そうなの」
和美「なんか汗かいたからって。待ちます？」
田ノ浦「あ、いやいや」
和美「あでも、どうせタクシー呼ばなきゃいけないじゃない」
田ノ浦「ああ。いいです。いいです。ちよつと歩きたいんで」

宗之「そう？」
和美「え、でも」

3人、上手玄関へ。

田ノ浦「あ、ここでけっこうですからほんと」

宗之「あ。いやいや」

和美「(あ、ブランケット)・あ、じゃあ、田ノ浦さんまた」(下手階段へ)

田ノ浦「あ、失礼します」

和美「ええ。また面白いお話、聞かせてください」

田ノ浦「あ」

和美「今度は彼女でも連れてきて」

田ノ浦「あ。は」

宗之「あ、そうそう、こないだ、須藤さんがね」

このセリフと同時に、玄関のチャイムが漏れ聞こえる。

和美「ん」

宗之「なんだろ、こんな時間に」

和美「ねえ、誰だろ」

和美、戻り、ふたりを追い、3人いなくなる。

階上から照男の微かな笑い声。微かなシャワーの音。

太郎「なに、もう」

照男「ええ？だって」

チャイム。

一方、玄関(声)

宗之「あ、いいよ、それ。開けちゃう開けちゃう」(和美がインターフォンに出ようとしたのだろう)

和美「あ、そう？」

微かにドア、開ける音。

宗之「あれ」

田ノ浦「あ」

はる子「すいません。ごめんなさい」

和美「どうしたの、はる子さん」

はる子「すみません、携帯忘れちゃったみたいで」

宗之「あ、携帯」

はる子「あ、そう」

田ノ浦「え、どこまで行ったんですか、今」

はる子「あ、やっとタクシー捕まって、乗った瞬間に気がついて」

田ノ浦「ああ」

はる子「ええ」

田ノ浦「え、ここ出たときは持ってたんですか？」

はる子「いえ。覚えてなくて・・・あの。ちよつと探していいですか？」

宗之「あ、どうぞどうぞ、もちろん」

和美「あ、じゃ、クローゼットじゃないかな」

宗之「ああ」

田ノ浦「こういうときって、記憶がないんですよ・・・わかります。最後に見たときをで

すね、思い出さないと」

はる子と宗之、言いながら舞台へ現れる。

宗之「あ、なんか今ね、シャワーを」

はる子「シャワー？」

宗之「うん、今」

はる子「えなんで」

田ノ浦（同時に）「あ、これじゃないかな」

宗之「あ、あった？」（奥へ）

はる子「あ」

ふたりとも奥へ消える。

宗之（声）「なん、これ、僕のだよ」

田ノ浦（声）「あ、そうですか。すみません」

宗之（声）「うん。あ、あれかな。キッチンかな」

田ノ浦（声）「ああ。あ、わかった、あそこだ。あの奥の」

はる子、現れる。

はる子（ひとりごと）「やっぱこっちはじゃないかな」

雅人に気がつく。

はる子「あ・・・斉藤さん？」

寝てるのだと思ひ、更に周辺を探す。（田ノ浦（声）「あれ、ソファにないですか・・・てことは」

冒頭に置かれたまま、携帯がある。

はる子「あ。あったあった。すみません、あります」

雅人が死んでいる。

はる子「斉藤さん・・・斉藤さん？・・・（驚）ハッ」

和美が言いながら入って来る。

和美「ないわねえ・・・こっちはありました？」

同時に、階上から、濡れた裸体の太郎と照男が踊り場まで、追いかけてこのようにやってくる。

太郎「こいつ、しょうがないなもう」

照男「違う違う違う」

太郎「今のは反則だろだって」

照男「なに言ってるんの、だってそっちが先に」

ふたり、情熱的にキスする。

END